

グラビア 作曲部会 作品展 2013 (6月14日)



①金藤豊作曲『静御前に捧ぐる挽歌』：合唱、尺八、打楽器による大きな編成 指揮は中嶋恒雄



②穴原雅己作曲による歌曲の演奏（歌：佐藤まどか）



古澤彰作曲「No meaning」の演奏



④高橋雅光作曲ピアノのための「カプリチオ」を演奏する松山元

## 作曲部会 作品展 2013 写真 (2)



⑤中嶋恒雄作曲小磯仁の詩による「海の約束」を演奏する女声合唱団：指揮は作曲者自身



⑥高橋通作曲「箏独奏ソナタ第8番」演奏：高橋澄子



⑦北條直彦作品を演奏する恵藤久美子



終演後の恵藤久美子（右）と北條直彦



⑧桑原洋明作曲『御佛の四つの本願』演奏：鈴木菜穂子

# 音楽の世界

## 目次

<b>グラビア</b>	<b>作曲部会 作品展 2013</b>		1-2
<b>論壇</b>	諏訪根自子と潮田益子	助川 敏弥	4
<b>特集</b>	<b>市民生活と文化(近代～現代)</b>		
	明治維新と文化	高橋 通	6
	書簡にまつわるゲーテ考察～生活文化の視点から～	吉田 卓	12
<b>コラム</b>	異聞「初演と再演」 / クローン		17
<b>リレー連載</b>	<b>未来の音楽人へ(6)</b>	戸引 小夜子	18
<b>海外レポート</b>	ロシア滞在記	恵藤 幸子	22
<b>時評</b>	援助、批判する側の想像力 / 三保の松原とイコモスの怪我の功名		27
<b>連載</b>			
	<b>音・雑記一ひなの里通信一</b> (59) . . . . .	狭間 壮	28
	<b>名曲喫茶の片隅から</b> (40) . . . . .	宮本 英世	30
	<b>音盤奇譚</b> (45) . . . . .	板倉 重雄	32
	<b>私とラジオ・ドラマ</b> (12) . . . . .	助川 敏弥	34
	<b>電子楽器レポート・連載-7、</b> グラミー賞受賞のローランド創業者、梯郁太郎	阿方 俊	36
	福島日記(21)	小西 徹郎	38
	明日の歌を (第7回 MITTENWALD 稲原和雄氏に訊く)	橘川 琢	40
<b>コンサート報告</b>	<b>作曲部会 作品展 2013</b>		46
	シューベルトの「未完成交響曲」を完成に導く為の予備的考察・II <b>奇蹟の引き継ぎは可能か?</b> . . . . .	ロクリアン正岡	50
	CMDJ 会と会員の情報		57

作曲：助川 敏弥

ヴァイオリニストの潮田益子さんが他界した。5月29日。71歳。白血病とのこと。この死因は、矢代秋雄さんやバルトークと同じである。年齢とはあまり関係がないようで、矢代秋雄さんは41歳、バルトークは63歳だった。

潮田さんは、1942年の生まれである。折から、音楽評論家、萩谷由喜子さんの著書、「諏訪根自子」を読んでいた。この本は、日本から生まれたこの世界的演奏家が、その時代と社会の状況の中でどのように生きて成長していったか、稠密な調査と取材の上、記述されている、貴重にして、まれな著書である。

諏訪根自子さんは1920年の生まれ。潮田さんの生誕とはほぼ20年の距離がある。当時、小野アンナさんというすぐれたヴァイオリン指導者が日本にいたため、諏訪さんだけでなく、すぐれたヴァイオリンの演奏家が日本で育った。とはいえ、20年の距離はいかにも遠い。諏訪さんが、あの当時の時代状況の中でいかに孤立したすぐれ才能であったか、あらためて思い知る。

この20年の間に、世界が、日本が、どのような時間を通過したかを考えると、二人のすぐれた演奏家の生涯を俯瞰することになり、あらためてその展望が現実感をもって見えてくるのである。諏訪さん生誕の時は、世界は二つの大戦の中間期にあった。しかし、不気味な地殻の鳴動が続いていた。すでに1917年、ロシアではレーニンの社会主義革命が発生、ロシアはソヴィエト連邦となった。小野アンナさんの来日もこの結果である。このほかにロシアから優れた人材が革命を避けて世界に拡散した。その人たちがすぐれた種子を各地に落とし成長させた。

1930年、世界同時の大不況。諏訪さんは10歳。日本、ドイツ、イタリアに次々とファシズム政権が誕生。世界は空前の破壊と破滅への傾斜を転落し始める。1930年生まれの筆者にとっても実感をもって思い起こされるおそろしい時代であった。そして、1945年、日本の敗北でようやく大戦は終る。この時、諏訪さん25歳、潮田さんは3歳。潮田さんの世代にとって、人生は「戦後」から始まったのである。敗戦後の五、六年、日本は廃墟から立ち直るため悪戦苦闘の時期だった。筆者は1950年に音楽の勉強のため東京に来た。この時、潮田さんは8歳。この頃からようやく立ち直った日本の音楽界は、戦争で失った10年の遅れをとりもどすため、無我夢中

の活動を始めた。音楽教育界では、早期教育の必要性がはじめて強く認識され、のちの桐朋学園になる「子供のための音楽教室」、音感教育、斉藤秀雄さんの少年期のオーケストラの厳密教育、こうした戦前にはなかった新しい教育運動が始まった。潮田さんの世代はまさにこの「新教育」の第一期生であった。

東京交響楽団の前身、東宝交響楽団は、定期公演のたびに世界の初演曲をかならず、一曲入れるという企画を実施していた。戦争による情報の空白、そのとりもどし。そのことに日本中が懸命になっていた。やがて、この企画はその時期が満了したということで中止された。演奏も教育も、空白を取り戻したいということ、そしてさらなる前進発展ということに無我夢中になっていた。そんな時代である。

話のついでだが、筆者の専門である作曲の分野では、「20世紀音楽研究所」なるものが立ち上げられ、軽井沢で「現代音楽祭」なるものを開催した。誰が見てもドイツの「ドナウエッシンゲン現代音楽祭」の引き写しである。余りの露骨さに、当時まだ若かった私たちでも眉をひそめたものである。評論家の吉田秀和さんが主導しての動きであったが、吉田さんはある時、ラジオで、黛敏郎さんの最新作とフランスのブーレーズの曲を並べて、「日本の作曲界がいかにもものすごいきおいで西洋を追撃しているか」、と語った。この時、タクシーの中で筆者はこの放送を聞いた。しかし、黛さんとブーレーズの比較は私にはどうしても、そうは聞こえなかったことを覚えている。

しかし、軽井沢「現代音楽祭」がいかにか軽薄であったにしても、東宝交響楽団の初演連続がいかにかあせりであったにせよ、これだけの懸命さがあったから現在の日本音楽界があるのだろう。いま21世紀も10年台まできて振り返ると、この時期の音楽界は演奏、作曲、教育、すべての分野で、遅れを取り戻そう、早く追いつこう、わるくいえばツッパリ意識と、あせりと、頑張り精神で充ちていた。いまそれを嘲笑批判することはできまい。何らかの頑張りの源泉がなければ人は力ここまでを出さないのだから。

振り返れば、諏訪根自子さんの誕生は明治維新からわずか50年後である。まったく未知の西洋音楽の分野で、よくもこの時期にこれだけの逸材が出現した。驚きである。そして、日本の音楽界、音楽教育界が本格的な始動を始めるはるか以前に、孤立の中ですぐれた成果を築いていったこのおおいなる先達にあらためて尊敬と感謝をささげるのである。そしてまた、戦後第一期の成果を体現した潮田益子さんにも一つの時代の使命を見事に果たした成果に尊敬と感謝をささげたい。

(すけがわ・としや 本会 代表理事)

## 明治維新と文化

作曲 高橋 通

### はじめに

世界地図を眺めてみると、日本は西洋からは遠く離れた東の端に位置し、ユーラシア大陸の東の方にぶら下がっているように見える。ここで先ず思い出すのが、トインビー等による「文明の十字路」と「行き止まり文明」の考え方である。アフガニスタンのような四方八方から民族と文化が往来する地域では、新しいものが流入して来ると旧来のものは一掃されて新しいものに置き換わってしまうが、日本のようにそこから先に行き場の無い地域～島国では、古いものを遺したまま新しいものがその上に層を成すように重なり合って残って行くという。非常に大雑把な捉え方であるが、日本の様々な習慣や伝統を見ると、なるほどと思うことが多い。



日本では、他民族の侵略に拠る歴史的な大転換は無いが、中国や朝鮮半島からの人や物、文化の流入はあった。しかも積極的に取り入れて来た。反面、江戸時代の鎖国政策に象徴される外来文明の流入を拒否した時期もある。この閉鎖的な時代に、日本の文化が独特の発展をして形作られた。

もう一つ、日本の文化の形成に大きく関わって来たものは、日本人の宗教観であろう。古来の自然崇拜の原始的な宗教観を堅持して、万物に神が宿るという多神教的な鷹揚さを日本人は持っている。仏教が流入して来た時期には、蘇我氏と物部氏の間で宗教戦争が有ったように説明されることもあるが、確かに宗教的な要素を孕んでいたが、その背後にある経済的・政治的な意味合いが強いと思われる。結局仏教を輸入したにもかかわらず、神道と称される古来の宗教が依然として日本人の生活に強く結びついている。神道だけでなく仏教も多神教的な要素を含んでいたことも要因である。

このような、日本人の根底に流れる特徴を考えながら、江戸幕府から明治政府への転換（明治維新～文明開化）、その後のいくつかの他国との戦争（特に太平洋戦争）を経て現在が形成されている。それは、政治や経済だけでなく文化的にも、である。

こういった視点を踏まえて、明治維新前後の「市民生活と文化」の変化を眺めて行きたい。

## 江戸時代の市民生活と文化

種々の学術論文や一般向けの書籍で詳述されているので、簡単に書いておくことにする。

江戸時代は二百六十余年もの長期であり、その間を一律に評価解説することは出来ない。戦国時代の余波を引きずっていた初期、爛熟した文化を作り上げた文化文政期、米に基盤を置いた幕府政治の終焉を感じさせる19世紀。

注目すべき時期は18世紀後半からで、我々が日本の伝統と思っている多くのものがこの時期が源になっている。鰻、天婦羅、握り寿司、懐石料理等は江戸時代になってから生まれたり発展したものである。それより古いものは熨斗や餅などである。音楽（音曲）では、三味線音楽や箏曲等の大半の伝統音楽は、江戸時代、しかもその後半に発展した。歌舞伎も江戸時代に生まれた舞踊演劇である。

江戸時代では、江戸の庶民の生活はそれほど困窮していた様子はない。幕府の庶民の生活管理方法が優れていたからであろう。江戸っ子は宵越しの～と言われるその日暮らし的な生活をしていたようだが、それは単に粋や見栄だけでなく大火による財産の消滅があったからで、蓄財する余裕が無かったのに加えて、火災に抛る財産の消失を嫌ったことも無関係ではあるまい。

商業を営む階層が発展したのは、江戸の中期で、海運業を営む者や札差たちの台頭によって貨幣経済が盛んになり、その豊かな金の循環が社会を動かした。そこで生まれた贅沢が、いろいろな江戸文化を発展させた。一方で、町民にも豊かな町人とそうでない庶民と呼ばれる人々の階層が生じた。

数回の改革によって、幕府は行き過ぎた経済状況を改善しようと試みてある一定の成果を上げたこともあるが、時代の流れには逆らえず、江戸幕府は終焉を迎える。

## 明治維新と文明開化

日本の歴史を辿ると、何となく明治維新は特殊に見えるが、基本的にはそれまでの政変と大きく変わることはない。単なる政権交替でしか無いと思える。その大きな理由は天皇制度である。江戸時代であっても天皇制度は維持されていたし、その前の戦国の乱世でも天皇制度は存続していた。日本では政権が変わっても天皇制度が無くなることは無かった。源頼朝が鎌倉に幕府を開いた時もその権威の根拠は天皇からの征夷大將軍への任命によるものである。どこかに天皇による権威の裏付けを必要としていたのが日本の歴史なのである。

明治維新では、天皇親政でその下に総裁・議定・参与が置かれた。確かに天皇の権威は強く尊重されてはいたが、明治政府樹立の立役者が力を持っていた。

庶民と称される底辺を形作っていた人々の生活は、江戸時代とそれほど大きな違いはなかった。政府が文明開化を叫んでも庶民の生活様式は突然変わることはなか

った。江戸時代末期の江戸市民の文化程度は当時の西欧諸国と比べても遜色は無く、流入して来た西欧的な生活習慣にすぐさま取って代わるが必要とされていなかった。

文化程度の指標とされることもある識字率は、当時の世界の中では日本の率は極めて高かった。19世紀初頭の日本人の読み書きに関する能力に付いて、ロシアのヴァーシリー・ゴローニンは多少の誇張はあるものの「日本には読み書き出来ない人間や、祖国の法律を知らない人間は一人もゐない」と述べていることから、日本の文化程度が高かったことは充分推測出来る。

明治期の各県の調査初年次の自署率(文部省年報による)

府県	調査初年次	調査対象	男子	女子	全体
滋賀県	1877年	満6歳以上	89.23	39.31	64.13
群馬県	1880年	満6歳以上	79.13	23.41	52.00
青森県	1881年	全住民	37.39	2.71	19.94
鹿児島県	1884年	満6歳以上	33.43	4.00	18.33
岡山県	1887年	満6歳以上	65.64	42.05	54.38

当時の西欧化を表す言葉として「文明開化」があるが、先ずは旧体制からの脱却を企てた政府は、廃藩置県、廃刀令を發布して、それによる武士階級の特権を排除した。これによって多くの武士階級が没落して行き、それを憂いた一派が西南戦争を引き起こした。

明治初期の西欧化政策で庶民にある程度の影響があったのは、散切り頭と靴、多少の肉食程度であったろう。しかも、影響を受けたのは、庶民階級ではなくある程度の上流階級であり、多くの市民にとって西欧化は殆ど影響がなかった。

しかし、殖産興業政策は、鉄道の開業や製糸工場の設立などを押し進め、それに日本人的な勤勉さが加わって明治期の産業革命と呼ぶべき発展をもたらした。西洋式の文物の流入によって産業構造は変化し、対外戦争の勝利によって軽工業を中心とする産業は格段に進歩した。

江戸末期にはかなり進んでいた瓦版などの情報伝達は、明治期に入って一層発展し、新聞が情報伝達の大きなシステムになっていった。

文明開化を押し進めた明治政府の目論みは、軍事力の強化が主眼であって、それ以外の文化的な西欧化は付随的に過ぎない。当時の西欧のアジア進出は目覚ましく、多くのアジア諸国が植民地化されていった。また、軍事力を伴わない貿易は多くの危険を伴うことに加え、高い利益を挙げられないと言う判断であった。

文明開化の象徴的なことは、鹿鳴館の建設とそこで開催された付け焼き刃的な舞踏会や音楽会であった。確かに、多くの西洋文化は流入したが、その受容方法は西欧人からは冷ややかな目で見られていた。



鹿鳴館の舞踏会（豊原周延の描いた浮世絵より）

明治維新に拠って、損害を受けた人々もいた。それは、江戸幕府から保護され恩恵を受けていた人々である。先に述べた、武士階級、それも幕府側に付いた諸藩の武士たちである。江戸時代でさえ、特権階級でありながら生活に困窮していた下級武士は、廃刀令で権威の象徴である刀を奪われ、生産的な職業を持っていなかったのも、自活することが難しかった。この余剰労働力は、北海道の開拓

の力となり、海外移住の原動力となったようだ。

江戸時代の音楽文化の一翼を担っていた当道制度によって保護されていた盲人達は、その拠り所を失って生活に困窮した。生活のために寄席で三味線の曲弾きをした検校もいたらしい。一方、譜化宗の廃止で、尺八の吹奏が名目上庶民に開放され、新しい流派が生まれた。江戸幕府から優遇されていた能楽は、保護者を失って能の上演には影響を受けたが、江戸時代から謡（ウタイ）は武家だけでなく町民の愛好者も多かったために、廃れること無く明治維新を乗り越えることが出来た。

万国博覧会は幕末には薩摩藩などが参加していた。その後、明治政府は第3回のウィーン、続くシカゴ、1900年のパリに積極的に参加したことによって、絵画、工芸などの伝統的な作品や音曲等の日本文化の紹介には役立ったが、商業的には必ずしも成功した訳ではなかったようだ。

## 江戸時代と同じもの変わったもの

明治維新以後に変化の大きかったものは何だろうか。明治政府の政策は西洋文化の輸入に拠る西欧化と軍事力の増大にあった。西欧化するには、鎖国時代の遅れを取り戻すために西洋の学問や情報を知ることであった。いくら識字率が高くても外国に占領された訳でもない日本の一般国民にとっては、外国語は生活必需のもので

はなかったのので、外国語の読み書きは全く出来なかった。従って、誰か知識人が外国語を翻訳する必要があった。効率的な翻訳をするためには、元の原因と語義が重なる言葉が日本語に必要であるが、二世紀以上に亘って続いた鎖国の中では、日本人の言葉の中に、西欧語と重なる単語が生まれてこなかった。例えば今日新聞や放送等で必ず聴かれる「経済」という言葉は、この時代の造語（福沢諭吉や西周らの創作らしい）である。新しい文化が流入する時にはこういう造語は必要であり、古代に中国からの漢字輸入によって、漢字そのものが日本語の造語方法を豊かにしていたので、新しい概念を日本語に置き換えることはさして不便ではなかった。また、漢字の本家である中国の造語を借り入れることも出来た。以下に、幕末～明治期に作られた漢字語をいくつか挙げておく。

**日本製の漢字語：**文化、文明、民族、思想、法律、経済、資本、階級、分配、宗教、哲学、理性、感性、意識、主観、客観、科学、物理、化学、分子、原子、質量、固体、時間、空間、理論、文学、美術、喜劇、悲劇、等。

**中国製の漢字語：**国債、特権、平時、戦時、民主、野蛮、越権、慣行、共用、私権、実権、主権、上告、例外。

余談だが、1946年に独立宣言をしたイスラエルであるが、当然のことながら国語をヘブライ語としている。しかし、西暦135年以来国を持たなかったイスラエル人は各地に分散してヘブライ語を維持していたが、方言が多く統一したヘブライ語ではなかった。また時代に適応した語彙（例えば「ヘリコプター」：קוֹסֵם）を持っていなかった。現代に見合った言葉が足りなかったのので、旧約聖書のなかから似た意味の言葉を探し、それに手を加えて新語を創ったそうだ。

こうした造語によって新聞の記事が書かれるようになり、一方では、言文一致という口語による文学等の創作が行われるようになっていった。

学校教育は、明治5年の学制の制定によって始まるが、就学率は低く、大正に入ってやっと90%に達している。（就学率には地域差が大きく、江戸時代末期の江戸に於ける寺子屋の就学率は70～86%で世界の大都市～イギリス、フランス、ロシア等の20%程度～と比べると遥かに高かった）

## 文化的な習慣

庶民の娯楽であった芝居見物に関係する習慣について少し書いておく。まず、芝居等を見物する時に現代人が行う拍手は江戸時代には無かったが、明治期に外国文化の影響で行われるようになった。西欧外国人の習慣を真似ることから始まった。元々日本では、手を打つことには二つの意味があった。一つは音を出して相手に自分の存在を知らせることである。もう一つは、両手に武器など何も持っていないという表明であった。だから、神社に参拝した時に拍手を打つのである。他人の行為を褒めそやす時に手を打つ習慣は無かった。

良い芝居であった時には褒めそやすことはあった。西洋ではコンサートの後にブラボーなどという掛け声があるが、日本では役者の屋号を声かけすることがある。それも、大向こうと称する舞台から遠いところから、タイミング良く声をかけることで舞台を盛り上げ、観客と役者を一体化させるものであった。この習慣は現在でも伝えられている。

反対に、貶すこともあった。半畳を入れたり野次を飛ばすなどである。「大根（役者）」という語源には諸説あるようだが、役者を貶す最低のヤジだった。半畳を入れるとは、芝居見物に用いた半畳程の小さな敷物を舞台に投げ入れて、不満を表した。最近の芝居では見る事が無いが、相撲見物では座布団を投げる事が今でも行われている。

庶民の最高に贅沢な娯楽だけに、その出来不出来の評価は厳しいものだった。

最後に就職について触れておく。丁稚奉公などは昔とあまり変わらないような形式で近年まで残っていた。江戸時代には、男子は子供の頃から見習いとして丁稚として奉公する習慣があった。丁稚は住み込みで掃除や使い走りなどをした。休みは藪入りの時にあっただけであった。給金も殆ど無い代わりに、衣食住は雇い主が保証した。丁稚と言う見習い期間が過ぎると、商売を覚えながら、手代、番頭などに昇進した。やがて、暖簾分けなどで独立することもあった。この丁稚奉公と似た就職形式～義務教育が終わると住み込みで就職すること～は、つい最近までしばしば見られた。

女の子には女中奉公というのがあった。女中には二種類あって、炊事洗濯などに関わるいわゆる下女としての使用人と、主人一家の身の回りの仕事をした奥女中があった。この奥女中は、場合によっては行儀見習いというような意味合いもあった。この風習は明治期には残っていた。今でも、私の祖母は徳川様に行儀見習いにあがっていたことがあった、という話を聞くことがある。

## 終わりに

明治維新前後の文化や生活を、ほんの一部であるが、比較して述べた。筆者の感覚としては、明治維新が市民生活に及ぼした影響は短期的には意外に少なく、西欧化を意図した明治政府の目標はごく一部しか達成出来なかった。むしろ、60年前に敗戦を経験して以降の変化の方が遥かに大きいと感じている。その理由については、歴史の速度が現代文明の発展に連れて加速度的に早くなっているからでは、と推測している。

(たかはし・とおる 本会 作曲部会長)

## 書簡にまつわるゲーテ考察 ～生活文化の視点から～

ドイツ文学・比較生活文化 吉田 卓



若き日のゲーテ（1749-1832）は、その才能を一気に開花させたかのように見えるが、実はいろいろな作品の構想を練り、またいくつかの作品に着手しながらも未完に終わっていた。未完に終わった理由として、ゲーテ研究家のシュタイガーは、自叙伝『詩と真実』からの一節を引用し、「当時の彼にはまだ文体と呼べるものがなかったからであった」（傍点筆者、以下同様）と指摘している。その「文体」を持たないゲーテに、比較的大きな作品を完成にまで至らせたのは、やはり異例というほかはない。それが『若きヴェルテルの悩み』である。何ゆえに、この作品が完成できたのであろうか。それは「書簡体」という彼にはまことに適切な「表現様式」があったからだ、といえるだろう。感情の起伏や心理描写を、一气呵成に書き上げることができたからこそ、例外的に完成するに至った。それが書簡体小説『若きヴェルテルの悩み』であり、シューベルトをして作曲せしめることにもなる『野ばら』などの叙情詩の数々であった。まだ文体というべきものをもたないゲーテにとって、「書簡体」という様式は、まことに好都合な表現手段といえるだろう。文体の形成を、時間をかけて待つまでもなく、完成された「表現手段」を、すでにゲーテはもちあわせていたということになる。



ゲーテ 16 歳（1765）頃の肖像画

ゲーテは生涯に一度だけ婚約をし、そののち解消をしている。この間の経緯を辿ることは、ゲーテの本質に迫ることになると同時に、「書簡」が重要な働きをしていると思われるので、次にこれを考察したい。

二人の女性が登場する。ひとりはおうぐすて・ツォー・シュトルベルク（1753-1835）で愛称グストヘンと呼ばれている。彼女はハンブルク郊外の修道尼院に住んでいた。おうぐすては、すでにゲーテと文通していた兄たちを見習って、熱烈な愛読者のひとりとして彼女もゲーテに宛てて手紙を書いた。すぐさまゲーテから1775年1

月18日付の返信が届いた。「・・・ところで僕の影絵を同封します。あなたのを頂

きたいものです。それも小さいのではなくて、大きい、等身大のです。アデュー。心からアデュー。・・・」。この第1信でゲーテはこのように述べ、早速アウグステの影絵を求めている。こうして始まった文通は、1782年3月4日まで、ゲーテは合計18通の書簡をアウグステに書き送っている。

同じ頃、ゲーテにはもうひとりの女性が存在した。その名はリリー・シェーネマン(1758-1817)という。愛称はリリーと呼ばれている。彼女の母親はフランクフルトの大きな銀行のオーナーで、すでに未亡人であった。リリーはこの裕福な家庭で育ち、シェーネマン家ではよく家庭音楽会が催された。彼女の弾くグランドピアノの演奏は優雅で魅力的であった。彼女をお目当てでやってくる男性も多かった。ゲーテと出会ったときのリリーは、まだ花も恥じらう16歳の若さであった。彼女の美貌を今日に伝えるものとして、パステル画の肖像画がある。リリーは目鼻立ちのよく整った、青い目、ブロンドの髪をした美人であった。ゲーテが初めてリリーと出会ったとき、彼女にはまだ初々しさが残る育ちの良さと気品が溢れ、いかに魅力的であったかが、その肖像画からも偲ばれる。華やかな社交界と化しているシェーネマン家で、華やかさを一身に集めるリリーと、『若きヴェルテルの悩み』で一躍流行作家としてすでに名を馳せていたゲーテとの出会いは衆目の的であったろう。このような中で26歳のゲーテは、1775年4月にリリーと不本意な婚約をした。この間、アウグステとの間では文通は続いていた。3月19日のアウグステに宛てた第4信でゲーテは、「・・・僕を愛し続けて・・・僕はすべてを分かちたい・・・僕を見捨てないで、高貴な魂よ！君の手紙で僕を追いかけて、僕を僕自身から救って・・・」と熱烈な愛の告白とリリーからの逃避を訴えている。

当時のゲーテにははっきりとした自覚があったかどうか定かではないが、リリーに深い愛情を感じながらも、家庭を持つ束縛から解放されたいという芸術家特有の強い願望が働いていたのであろう。このようないわばデモーニッシュな心理作用はライプツィヒ時代のシェーンコップとの恋愛においてもみられたところである。

ではアウグステとの文通は、何が特異なのだろうか。これまでのゲーテの文通の相手は、ほとんどすべてが面識のある、よく知っている人たちであった。したがって、そのような人との文通は日常生活の延長線上のものであって、人間関係がベースにある。そのため差し出す相手に対して失礼がないよう必ず制約を受ける種類のものである。ゲーテにとってアウグステは、全くと言っていいほど、日常生活上のつながりはない。一度も出会ったこともない相手であるだけに、自由な想像を描きながら、ペンを走らせることができる。アウグステ宛ての書簡はゲーテにとって、いわば「非社会的な散文」ということになるだろう。ゲーテ研究家グンドルフの次の見解が、より一層理解される。それは、「ゲーテの談話」・「ゲーテの書簡」・「ゲーテの作品」のなかで、ゲーテその人自身が語った「談話」こそが、その人の本質を考察するうえで最も中心に迫るものだという短絡的発想に異議を唱え、ゲーテの

残した作品こそが彼の本質の中心に最も迫るものだと述べている。その理由は「談話」の場合、対談者からの質問に応えるものである以上、能動的ではなく、被動的になり、話の進め方、方向などが、ゲーテの意図とは別に、対談者に左右され、制約を受けるからである。その意味においては「書簡」も同じである。「書簡」の相手とは、社会生活における人間関係が厳然と存在している。これが「社交的」な関係というもので、人々は失礼がないように努める。ゲーテといえども例外ではなく、彼の書簡も少なからず制約を受けている。グンドルフはこれを「能動的でなく被動的」という表現を用い、書簡を出す相手によって、影響を受けるとしている。こうしてみると、ゲーテにとってアウグステは最も影響を受けることの少ない、最も被動的でない相手と言えるだろう。

さて、アウグステに対する最大の疑問が残る。それは、ゲーテがアウグステと一度も出会ったことがないことである。彼女宛ての第1信で、アウグステの影絵を求めたことはあったが、生涯一度も彼女と出会ったことがなかったのである。アウグステに宛てて書いた18通のゲーテの書簡をみると、信じられないほど、アウグステへの思慕で溢れている。一度も出会ったことのない相手にこのような感情を抱けるものであろうか。ゲーテほどの自由人が何ゆえ未見のアウグステに対してこのような感情を持ち得たのであろうか。やはり不可解である。この問題を解く鍵が、自叙伝の『詩と真実』にあるように思われる。逆説めくが、あれほどアウグステのことを熱烈に愛していながら、『詩と真実』にはアウグステのことはいっさい述べられていない。ヘッセ研究で有名な高橋健二氏は「・・・顔を知らぬアウグステをリリー体験のざんげ聴聞者にして、恋の幸福と悩みを訴え続けた。・・・恋しているゲーテとそれを観察し報告しているゲーテがいる。同時に、アウグステをもまだ見ぬ恋人にして、リリーと並行して愛している。・・・」と述べている。ここで用いられている「聴聞者」という表現は、アウグステの存在を的確に言い当てていると思われる。的確にと言ったのは、たとえば相撲の行司に勝敗を裁く本来の仕事だけでなく、行司に回しを締めさせ、相撲をとらせる状況を想像してもらいたい。ゲーテは、キリスト教の聴聞僧が信者の懺悔を聴くように、リリーとの恋愛上の苦しみを聞いてくれるようアウグステに求めると同時に、恋人の役目も演じてくれるよう要求しているのである。しかも、どちらかと言えば、アウグステ宛ての第1信で明らかのように、最初からゲーテの恋人の役目も要求している。ゲーテがアウグステと文通を始めた頃は、まだリリーと婚約していなかった。しかしこの頃のゲーテは同時進行の形でふたりの女性を愛していたことになる。アウグステには、リリーとの恋愛の懺悔を語りながら、同時にアウグステの影絵を見ながら「哀れな若者を胸に抱きしめて下さい」と愛の訴えをしている。

たしかにゲーテはふたりの女性を同時に愛していたかに見えるが、リリーとアウグステとではその愛の内容は違うように思われる。ことにアウグステに対する愛は

ゲーテのこれまでのものとは明らかに異なっている。まだ一度も出会ったこともないアウグステとの間には社交的な人間関係は生じない。彼女がフランクフルトから遠く離れた所に住んでいるため、ゲーテの彼女に対する意識は非日常的であり、非現実的で、いわゆる生活を引かずともなければ、「社交的」であらねばならないと、努める必要もない。一方リリーの方は、同じフランクフルトの町に住み、お互いの家の家風や家族構成から、その家に入出入りする人まで、両家の違いについてゲーテはすでに熟知している。多感なゲーテには、鏡に映る自分の情熱の炎に恋するようなどころがあった。それゆえにゲーテには情熱の炎を映す「鏡」のような存在を必要とした。それと同時に、リリーとの婚約から生ずるゲーテの心の動揺を、黙って聞いてくれるような「聴聞僧」が必要であった。この二つの役目をゲーテはアウグステに求めたのであった。その役目を果たしてもらうには、社会生活圏が同じでない、遠い所に住む人の方がむしろ好都合であった。したがってその人とは当然のことながら「社交的」関係は存在しない。どんなに熱烈に、また激しい愛情表現をしても、婚約をさせられたり、家庭を構える話にはならなかった。同じフランクフルトに住むリリーの場合はそのようなわけにはゆかなかった。ゲーテとリリーの間には「社交的」関係があるからだ。こうして見てみるとゲーテと同じ時期に二人の女性を愛したからと言っても、リリーとアウグステとでは恋愛の次元が異なっている。アウグステとの特異な関係を続けるためには、むしろアウグステとは一度も出会わない方がよい。事実、この頃アウグステの兄たちはフランクフルトのゲーテの実家を訪問している。ゲーテが何としてでもアウグステに会いたいという願望があれば、アウグステとの出会いは可能だったはずである。残された「書簡」だけを資料にして、ゲーテの恋人の対象としてリリーとアウグステのふたりを比較したら、リリーの方がはるかに不利である。アウグステに宛てた書簡の多くは、まだ見ぬ女性アウグステへの激しい思慕の念や愛情表現が綿々と連ねられており、しかもリリーとの結婚への動揺などが認められている。残された「書簡」だけで判断するかぎり、ゲーテはリリーよりもアウグステの方を深く愛していたかのように見えるが、それは性急な結論と言うべきだろう。

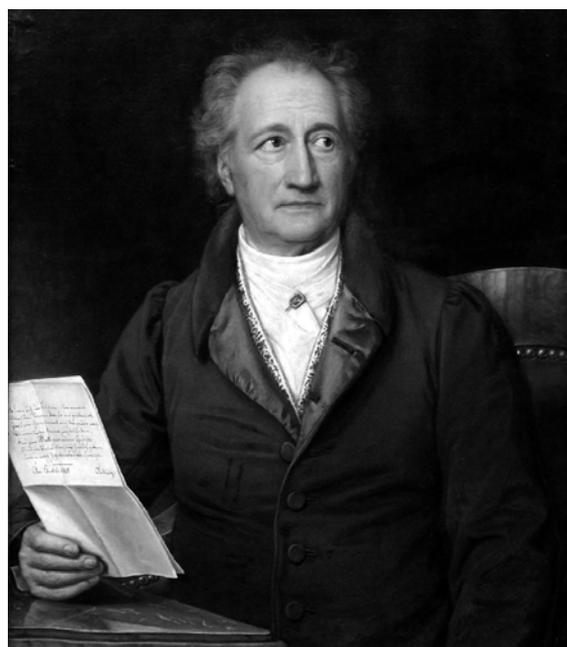
興味深い事実がある。晩年のゲーテは過去に愛した女性のことを回想するとき、いずれも深い愛着と懐かしさを示した。そして昔の恋人に出会えるのを大きな喜びとした。しかしアウグステに対して、ゲーテはそのような感情を抱いたとは思われない。例えばあの熱烈な文通から47年後の1822年に、アウグステは文通を続けていた頃の気持ちそのまま、昔ゲーテが自分に表白した情熱的な文面を書簡に引用し、ゲーテの元に差し出した。それに対するゲーテの反応は冷たく、彼はとまどいを示した。これとは逆にリリーに対してゲーテのとった行動は対照的なものとなっている。ゲーテは1779年のスイス旅行の途中、銀行家チュルクハイムと結婚したリリーをわざわざ訪ねている。また81歳になったゲーテは、リリーの孫娘が訪ねて来た

きも大いに喜び、その孫娘にリリーの面影を見、昔の恋人を偲んだ。これらの事実と軌を一にするかのように、自叙伝『詩と真実』には、リリーのことは好意的に書かれているのに、アウグステのことはいっさい述べられていない。全く意図的にアウグステのことを隠しておきたいかのように思えるほどである。次のようなグンドルフの見解は、この状況を的確に表現しているように思われる。グンドルフはいう「彼（ゲーテ）は詩人的な人間、灼熱している人間であるがゆえに、彼の詩的なデーモンは愛であるがゆえに、彼の愛人が入り込み、広がり、反響することのできる佳人が彼に出会うのである。約言すれば、愛はゲーテにおいては常に愛人よりもさきに存在する。歌うという働きが歌というその結果よりもさきに存在するのと同様である。」（カッコ内および傍点筆者）

もともと官能的に敏感で活動的な体質を豊かに備えたゲーテには、必ずしも愛の対象が先に存在する必要はなかった。彼自身が常に情熱や愛の要素の中で活動している詩人であった。彼は絶えず灼熱している人間であり、常に何かを愛している人間であった。グンドルフの言葉を借りれば、歌うという行為が歌という存在よりも先にあるように、対象よりも先に彼の愛するという行為が初めにあって、この行為に反響できる対象がゲーテと出会うのである。

いつも心を打ち明ける相手を必要としたゲーテは、アウグステのような存在が必要であったが、それがアウグステでなければならぬという必然性はないように思われる。この時期に別の「ヴェルテル」の愛好者が、それもフランクフルトから遠く離れた土地から手紙を差し出していたら、その人との間でアウグステのような関係が成立していたかもしれない。未見の女性アウグステとの文通による熱烈な恋愛から47年後、彼女に示したゲーテの冷ややかな対応がそのことをよく物語っているように思われる。

（よしだ・たかし 大阪学院大学外国語学部教授 本会賛助会員）



70歳のゲーテ（肖像が描かれたのは1828年）

### 【著者紹介】吉田 卓

現在、大阪学院大学外国語学部長。日本比較生活文化学会代表理事・日本文体論学会常任理事。専門、ドイツ文学・比較生活文化・文体論。主著・論文：『ヘッセからの手紙』（共訳）毎日新聞社、『プリーマ独和辞典』（共著）三修社、『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集第6巻』（共訳）臨川書店、「ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』における〈聖ヨゼフ二世〉の模倣について」（『西日本ドイツ文学・第11号』）、『比較生活文化考』（共著）ナカニシヤ出版など。



**音大付属中学への進学～ピアノを弾くのが大好きだった**

私の小さいころは、スタンドピアノ（現在のアップライト）のある家は珍しいという時代でした。ピアノを持っていたとしても、裕福な家庭のお嬢さんのたしなみ程度、という習い方をしていた人が多かったと思います。私は、近所の男の先生にピアノを習っていました。そこのお嬢さんが国立音大（国立音楽大学）の教育科に通っていらしていたこともあり、「早期教育を受けた方が良い」と国立音大付属中学への入学を勧められたのです。そして国立音大の先生のレッスンを受けることになり、その近所の先生もついていって下さいました。私の家は、母が三味線や琴を演奏していて、父も一緒に演奏することもあるという家庭で、私がピアノを弾くことに理解があり、母は私の発表会になると住み込みの女中さんと一緒に私のドレスを作ってくれました。私もピアノを弾くのが大好きで、まだ創設もない国立音大付属中学に入学しました。



附属高校時代の音楽会にて

入学した頃は、まだ校舎ができていなくて、大学の校舎にいたり、近隣の桐朋（私立中・高校）の馬小屋を借りていましたが、中学2年のときに新しい校舎が出来、そこに移りました。いくつかの一般科目の授業は、近くの桐朋の先生と国立（都立高校）の先生が時間給でいらして教えて下さいました。学校ができたばかりでカリキュラムがしっかりしていなかったのでしょうかけれど、実技レッスンは一般科目の授業中に抜け出して受けるということになっていました。ですから、実技レッスンの時間と一緒にあった科目は授業が半分しか受けられなくなりました。私自身は、数学や社会の勉強が足りなかったなと思いますが、仕方のないことでした。また、中学から、初級ではありますがドイツ語の勉強もありました。

音大の附属中は多彩で個性的な人が多かったです。のちに芸能界や宝塚に行った人もいましたし、芸大（東京芸術大学）を目指していた人もいました。有馬大五

郎先生（国立・創設者）のお考えで、自分のセンスを磨くように、と制服はなく私服でした。自由な学校で、普通の学校では得られないような経験をしました。

中学1年のときに、NHKの合唱コンクールに出場することになり、先生方が熱心にご指導されました。そのコンクールでは優勝したのですが、音大附属中ということで、もう受けないでほしいという内々の要請があったようで、その年以降は受けませんでした。でも、優勝したことにより、N響（NHK交響楽団）との共演が増え、日比谷公会堂などで演奏の機会もあり忙しかったです。特に待ち時間が長かったという思い出があります。また、ホテルのクリスマス会に呼ばれ、ハープ奏者のモルナール先生達と共演し、帰る時にケーキをもらったのがうれしかったのを未だに憶えています。

高校ではダンスの授業もあり、ジルバやタンゴ、ワルツを習い、それを実践しに近くの一つ橋大学の大学祭にも行ってみました。なかでも早期教育でよかったと思うのがリトミックです。

### リトミック教育の恩恵



リトミック授業風景の今昔：上が昔、下が最近の写真  
(国立音楽大学 附属中学・高校提供)

国立音大附属中学校では、アメリカでリトミックを学んで帰って来られたばかりの板野先生の授業がありました。板野先生はリトミックの草分け的な存在で、アメリカで学んできたリトミックを私たちにやらせてみよう、という感じで授業をなさいました。今はヤマハなど音楽教室でもカリキュラムにいられていますが、手で四拍子の指揮をしながら足でリズムをとったり、皆で輪になり、先生の太鼓の音が変わるたびに違うリズムをとり、(手は2拍子、足は3拍子、合図があるとその逆をする)などということをしていました。先生

はこの様な私たちとの授業をもとにリトミックの教則本を書いて発行していたようです。

リトミックの授業のおかげで、私達は早期に柔軟にリズム音楽を学ぶことができましたと思います。中学、高校のリトミックで学んだことは、後にピアノを教えるようになったときにも生きてきたと思います。

### 水谷達夫先生の教え

附属中のときには、中学校専属のピアノの先生に師事しました。皆、学校に入ってみなければどの先生につくかわからない、というシステムでしたが、高校からは

シュナーベルの直弟子だったドイツから帰国したばかりの先生につきました。日本語よりドイツ語が先に出てくる先生で、メソッドよりも実演で教えることを優先される先生でした。その先生がドイツに研修に行かれる間に、代講として教えていただいたのが水谷達夫先生（芸大）でした。

水谷先生は、レオ・シロタの弟子でしたが、形式ではなく、音楽とは何か、ということをお教え下さいました。生徒の良いところを伸ばすことによって欠点が補える、というお考えで、「良いところを見つけると欠点がなくなっていくね」とおっしゃっていました。レッスンに行くと「どうだ、弾いてみろ」と言わんばかりにどっかりと椅子にすわってじっと見据えられてピアノを弾くのですが、その感性は厳しかったです。歌って弾かなければいけないところを歌っていないと、悲しまれました。また試験の時は、出来がよかったときには、私たちの控室に顔を出され、少し褒めていただけました。水谷先生にレッスンを受けたことで、私は音楽とは何か、ということが少しずつわかってきました。それから、水谷先生には、大学を卒業して専攻科に行ったときにも師事しましたし、卒業後先生が亡くなるまでレッスンを受けました。

### 後進の指導にあたって

専攻科を卒業してまもなく、母校（国立音楽大学）で教えるようになりました。ピアノ科だけではなく、教育科の人も教え、初めの頃は、家庭が裕福なお嬢さんが多かったのですが、次第に、音楽を手段として大学に入る人が多くなってきたように思います。40年ほど教えました。卒業する人がどういふところに就職できるのか、合わせて考えて積極的に教育してあげればよかったと思っています。今は卒業後に音楽関係に行く人が少なくなり、ピアノ科よりリトミック科、音楽情報科、マネジメント科など、目的がはっきりしている科のほうが就職しやすいようです。ピアノ科の学生で、就職活動中に「ピアノの他にあなたは何かできるのですか？」と聞かれた人もいます。どういふところに就職させるのか、間口を広げて学生をフォローすべきだと思いますが、今は留学するにも語学の条件等のハードルがとても高くなっていて、留学も難しくなっていると感じます。



ザルツブルクにて（1992-7-30）  
ドレンスキー氏のクラスのコンサートのあとで

## 技術、精神力、体のバランス

演奏には技術と精神力、そして体の兼ね合いが大事だと思います。そのバランスを自分で考えられるように勉強していかなくちゃと思います。今の若い方には技術の達者な人が多くなりましたが、勉強するのであれば、そのバランスを考えられるレベルまでやらなくてはいけないと思います。

## 留学される方へ

若い方は、ご自分なりに自分を活かす手段をお考えになっていると思いますが、留学されるのであれば、レッスンを受けて曲を勉強するだけではなく、現地に住んでいる人たちとぜひ交流してほしいです。講習会などでも日本人だけでまとまってしまうケースもあるようですが、それでは得るものがありません。かつてショパン・コンクールを受けた方で、ポーランド人の家に住み込んで勉強されていた人がいて、3位か4位をとったのですが、そのくらい積極的に現地に飛び込んで勉強してほしいです。せっかく向こうに行くのですから、日本にないものを勉強してこなければ行った意味がありませんし、音楽の原点を観に行ってきたことになりません。その国特有の歌やリズムを体感したり、外国の調律が整っていない硬い・古いピアノで弾くのも一つの経験になります。日本にはないような体全体、腕全体を使って弾く演奏法も勉強して、後になってだんだんに理解できる様になるのではないのでしょうか。

## 日本音楽舞踊会議（音舞会）での活動を通して

音舞会での活動は自分にとってもある意味でプレッシャーになり、自分の意識が高まります。本番があれば、練習することになりますし、その他の勉強もし、後ろから押されて意識が高まっていくという感じです。続けるのは簡単ではありませんが、自分をあえてそのような環境においているのでしょうか。ステージに出ることによって得られることも多く、また、他の会員の皆さんとの交流も刺激になります。表には出さないけれど、ご自分を維持していくことに苦労されている、そういう姿をみると刺激になり、完成するわけではないのですが、自分で線は引かず、もう少し続けていきたいと思っています。何年か前から、日本音楽舞踊会議の青年会員を育てましょう、という目標がありました。皆さんコンクールを受けたり、海外に出たりリサイタルまで開催される様に成長されて、正会員の域に入ってきた感があります。幅広い年令と分野の会になることを期待しています。

（とびき・さよこ 本会 副理事長）

今回の連載文はご本人のお話をもとに構成しました。インタビュアーとして、太田恵美子さん（会員・ピアノ）にご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます

（取材日 2013年5月19日 新宿にて 文責：湯浅玲子）

# ロシア滞在記

ピアノ 恵藤 幸子

## 私のクラス、ロシアのピアノニズム



ポリジョイ劇場前の筆者

私の先生であるエリソ・ヴィルサーゼ氏は、普段はモスクワにおらず、1カ月に1回くらいの割合で、コンサートとレッスンのために学校にこられる。彼女が学校にいない間は、三人いるアシスタントのレッスンを受けることができるが、クラスによって様々なシステムがあるようだ。私のクラスと同じようなシステムをとるクラスもあれば、アシスタントを持っていない教師たちは、一週間に一人で二回レッスンされる人たちもいるらしい。ヴィルサーゼ先生はというと、彼女が来られる時は一カ月に一〜二回、大体三日〜一週間ほど毎日朝から晩までレッスンをされる。そして、彼女のように教授クラスになると、レッスンは電話で予約するのではなく、彼女が教室にいる時間をみはからって、生徒が好きな時にそこへ入るシステムとなっている。これがとんでもなく大変で、彼女が何日の何時に学校にくるかもしれないという噂が門下生たちの間で囁かれようものなら、その日を境に、先生がいつ来ても良いように、彼らは校内をウロウロし始める。噂が正しくない時もあり、一日中待っても彼女が来ら

れないこともざらである。

学校には学校の練習室のカギを管理している部屋があり、日本の音大と同じで、カギのおじさんやおばさん（ロシアでは何故かこういう仕事をする人たちは、おじいさんかおばあさん）が、一日の練習室の使用状況を一覧表によって全て把握している。そこで、ヴィルサーゼ先生がクラスにいるという情報が流れれば、即座にクラスに向かうのだが、たとえ急いで行ったとしてもすでに十人位の門下生たちがレッスン待ちをしているのが現状である。教授クラスのレッスンの厳しいところは、自分の番が回ってくるまで、他の門下生の演奏をきかなければならないことである。十人いると、たとえ夜十時過ぎまで待っていたとしても、その日のうちに受けられないこともある。私は、一年目の時には優先順位が低く、ロシア語もうまく喋れず、抜かされたりもして、ほとんどレッスンを受けられなかった。ただ、他の生徒のレッスンを聴くのは本当に勉強になると思う。ヴィルサーゼ先生のピアノニズムを近くで感じるができるし、生徒たちからも様々なヒントを得ることが出来た。

ロシアのピアノニズムというと、何を思い浮かべるであろう……。

私はロシアに来る前までは、ロシア人ピアニスト＝fff というイメージが強かった。とにかく強い打鍵で、fff はとことん fff でというイメージである。確かに強い打鍵は、かなりのクラスの先生方が教えていることらしいが、私のクラスでは、強いことよりも、内面からの歌、そして、全体を音楽として大きくとらえることはもちろんだが、その中でも一音一音に意味を見出すことを大事にしていると思う。このメソッドは、二年いる今でもまだまだ吸収しきれていない。これからも精進していきたいところである。

## ロシアの娯楽

モスクワ音楽院には、主なホールが三つあり、他にも小さなホールがいくつかある。そして、どのホールでも、毎晩毎晩（時には昼にも）コンサートが行われ、しかも学校で行なわれるコンサートに、私たち学生は無料で入ることができる。特に、四年に一度開催されるチャイコフスキーコンクール舞台であるボリショイザール（大ホール）では、アンドラーシュ・シフ、ワレリー・ゲルギエフ、ヴィルサラエフ先生の演奏を聴いて、感動したことを今でも覚えている。



ボリショイザールでの学生オペラ

ロシアにとっての娯楽は、バレエ、オペラ、コンサート、美術館、博物館などである。日本のように娯楽施設が溢れていないせいで、デートスポットも限られてくるためか、

ロシア人は早くに結婚するらしい。

そして、この私も、ロシア人にダーウィンの種の起源博物館に連れて行かれたことがある。猫のサーカスや水族館、プラネタリウムに行ってみたかったのに、何かと理由をつけられて、何故かダーウィンに落ち着いてしまった……。そして、そんなところに人などいるものか、と思っていたら、いるわ、いるわ。小さい子供や若いカップル、老夫婦まで。他に行く場所が無かったのかと思い、不憫に感じてしまった。

娯楽といえば、あとはロシア人が好きなのは散歩である。ロシア語を勉強し始めた時に、一番初めに覚えた動詞の中に、散歩をするという単語があった。最初は絶対に必要ないだろうと思っていたが、こちらに来てからは、一日一回は必ず聞く気がする。買い物に行くたびに「散歩？」、学校に行く時ですら「散歩？」。ロシア人にとって散歩は、タダで出来る最高の娯楽なのかもしれない。

## ヨーロッパとはちょっと違う

前にドイツやウィーンに行ったときに思ったことがある。主要な通りや広場で、音楽を勉強している学生が、自分たちの演奏を聴いてもらおうと、仲間たちと演奏している姿をよく見かけた。日本には無いことなので、良いなあと思ってしまうのだが、よく考えてみれば、ロシアで屋外演奏をしている人は、少し歳のいったヴァイオリン弾きか、アコーディオン奏者、ロックバンドぐらいしか見たことが無い。むしろ通りには物乞いの方が多い気がする。そして、楽器を演奏する人たちは、ほとんどが地下道で行なっている。冬は極寒のモスクワである。屋外で生演奏は不可能だろう。そして、地下鉄でもアコーディオン弾きが、駅に着くごとに一輛ずつ歩きながら、演奏を披露するところを見かけたことがある。しかし地下鉄ではどちらかというと、脚や下半身がまったくない元軍人が、地面すれすれの四つ車輪がついた荷台を両手でこぎながら「金くれ」と一駅ごとに車両を乗り換えてくることが多いし、印象にも残ったが……。

モスクワ音楽院の学生たちは、どこで自分たちの音楽を披露するのかというと、ちょっとした学校や、美術館、博物館などで弾いてほしいという依頼は結構よくきたりするものである。こういうところには必ず音楽好きな客が集まり、色々な話をして、和やかな時を過ごす。私は、ロシアのこのスタイルは、とても気に入っている。

## 水風呂週間

この記事を書いている現在、寮の全ての水道から、お湯が出なくなるという水風呂週間が始まった。このシステムは、集中配管の整備で地区ごとにお湯が使えなくなるもので、つまり一週間～十日間はシャワーからは水しか出なくなるのだ。その間、寮生たちはどのようにこの地獄の週間を切りぬけるのかというと、まずロシア人は、シャワーを浴びなくなる。そして彼らは次第に異臭を放ち始める。元来、モスクワは空気が悪いためか、まわりのロシア人はあまり鼻が利かない人が多い…

# 音楽現代

2013年7月号 定価 840円

♪特集＝今、注目の若手アーティストたち

♪特別企画＝交響曲第7番物語

～ベートーヴェンの第7番初演200年記念～ハイド  
ンから現代まで、

♪カラー口絵

・ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン 2013

・ワーグナー生誕200年記念コンサート（ドイツ）

・関西二期会「夢遊病の女」

♪インタビュー

池辺晋一郎

エルヴェ・ブートリー（アンサンブル・アンテルコ  
ンタンポランGM）

福川伸陽＋三浦友理枝

市原愛、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL3861-2159

…。彼らは特に普段から毎日お風呂に入る習慣がなく、あまり気にしていないようである。

他の国の方々はどうかというと、トルコ人はちやっかり近くにあるジムで快適に清潔ライフを送っていた。かくいう私も、今年は彼らの紹介に甘んじて、ジムにて快適清潔ライフを送らせてもらった。去年は頑張りすぎて大風邪をひいたのだ。風邪をひくと、何もできなくなるので、今年は絶対に、同じ過ちは繰り返さないと心に誓っていた。



雪が残るクレムリン宮殿（国立）とその周辺



寮のキッチン

そして、私が去年やったこととは…。ほとんどの日本人がやっていることであるが、まずキッチンのコンロでお湯を沸かし、それをバケツに入れて、シャワールームまで運ぶという作業である。私も、11リットルバケツに小さな鍋で何度もお湯を沸かし、シャワールームまで何度もこぼしながら運んだ。そして、いくら11リットルあったとしても、髪を洗うには足りないの、髪はシャワーの水で洗って、命のお湯は最後にとっておくのだ。い

くら6月だとしても、モスクワの6月はたいして気温が上がらないので、寒いこと寒いこと。

そして寒い中、お湯の残量を見はかりながら料理用鍋でお湯をかぶる。シャワーにはしきりがあるが、となりにいた韓国人が終始、冷水で洗っていて、しきりの下から冷たい水が飛んできたことを、今でも覚えている。噂によると、韓国人は皆、この水風呂週間中は冷水で身体を洗うとか。美容のためか否か。恐るべしである。なにとはともあれ、水風呂週間は二度と体験したくない思い出である。

## ロシアの食生活

ありがたいことに、食生活にいたっては、ほとんど不自由していないと言っても過言ではない。なにせ近年の日本食ブームのおかげで、ちまたには日本料理店がひ

しめきあい、日本食の材料もわりと手に入る。お米にいたっては、美味しいものも含めて、豊富な種類がスーパーに並べられ、そばやうどんですら、どこの店でも手に入る。そしてなにより、レストランの食べ物は、どこも美味しい。ただ、円安の関係もあって、物価が少し高いモスクワでは、毎日の外食は少々厳しい。



学校の食堂で初めて食べたボルシチと何かのパスタとロシアのサラダ

私は料理が好きなので、ほとんど自炊しているが、去年までは炊飯器が無かったので、結構大変であった。まず、コンロに火をつけるところから、とても苦労した。日本のガスのように、回せば火が出るのではなく、まず、回してから、反対の手に持った

ライターで、直接コンロに火をつけなければならない。特に、チャッカマンが無かった時は、ライターだと火花が散るし、指がたまに焦げるしで、危険極まりなかった。今でもマッチで火を入れているロシア人がいるが、たまに悲鳴をきいたりする。しかし、彼らが文句を言うところを一度も聞いたことがない。これは、ロシアという国にこれ以上のものを求めても仕方がないという諦めからくるものでもあるが、ともすれば、彼らの持ち合わせている忍耐強さの根源ではないかとも思う。コンロの火に限らず、様々な場所で、この国では忍耐を必要とするのだ。

私は、ロシア人の忍耐強さからくる精神は、結構好きである。

私の住んでいるロシアは、こんな所ではあるが、この二年間で、音楽も、音楽以外も、様々なことを学んでとても勉強になった。これからもここで、勉学に励んでいきたいと思っている。



ワシリー寺院（聖ワシリー大聖堂）

（えとう・さちこ 本会ピアノ部会 青年会員）



**時評****救助、そして告発する側の想像力**

高市政調会長が「原発事故で死者はなかった」と発言し、原発事故の被災者から激しい怒りをかった。確かに放射線による直接の死者は出ていないが、風評被害で農業が立ち行かなくなったことを悲観して自殺した人や、政府の地域ごとの放射線量の発表データがくるくる変わり、その度に移転を重ねる中で心身のストレスが溜まり、死亡した高齢者など、かなりの多くの被災者が間接的な被害で亡くなっている。また、放射線汚染除去作業が進まず、故郷に帰りたくとも帰れない多くの被災者の存在など、この事故がもたらした物心両面の被害は、数字で表せない非常に大きなものであろう。一方、事故を起こした悪者に、正義の鉄槌を食らわせようという心づもりか、あるいは刺激的な記事を書いて、自社の発行物の売り上げアップを目論む魂胆からか、正確な科学的分析を踏まえない無責任で扇情的な記事を書き、風評被害を拡大している一部のジャーナリズムの存在がある。例えば、原発事故による海水汚染を、第二の水俣病に喩え、告発記事を書いたジャーナリズムがあった。放射能汚染と、有機水銀汚染の違い、そしてその程度を正確に調べもしないで、そういう記事を書くことで、結果的に東北・北関東の漁業は大打撃を受ける。少し前の話だが、福島県産の野菜がスーパーで安く売られていた。美味しそうなので私は買って来たが、福島産というだけで、風評被害を受け売れ行きが悪いようである。我が国の放射線量に対する基準値は世界的にみてもかなり厳しい。その基準をパスした農作物なら、まず、安全と判断して間違いなかろう。それよりも、残留農薬などの方が、よほど危険ではなかろうか。人は、正義をかざしながら、結果的に被災者を苦しめる場合がある。助ける側の人間、批判する側の人間にこそ、被災者の立場を思いやる想像力が必要であろう。

また、批判をするからには、ムードに流されるのではなく、正しい判断力を培うために、日々勉強を積み重ねる努力が必要となろう。（ツチグモ）

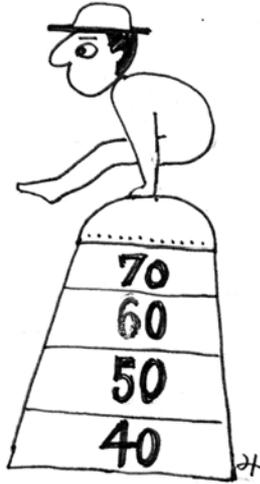
**時評****三保の松原とイコモスの怪我の功名**

6月22日に富士山がとうとう世界文化遺産に登録された。中国の人が泰山はすでに世界遺産として登録されているのに、なぜ富士山はまだなのかと不思議がっていたが、自然遺産としての登録を断念して、今回ようやく文化遺産として認められたのは、世界の多くの人々が日本のシンボルとしてイメージしている山だから、むしろ、当然のことと謂えよう。

しかし、富士山登録の過程で ICOMOS (International Council on Monuments and Sites = 国際記念物遺跡会議) は、松原を外すという条件を示した。ところが、世界遺産委員会の審議において、20ヶ国のうち、19ヶ国が三保の松原を加えるよう主張し、大逆転で、三保の松原も含めることが決定された。日本人なら羽衣伝説の舞台であり、広重の浮世絵など多くの美術作品において、ここから眺望した富士が描かれており、富士山と深い関係を持っている地ということを知っているが、今回の大逆転は、関係者が各国の委員に対して、丁寧にして熱く、その文化的価値を説明し、説得した成果が現れたものと思う。とかく、我が国の人間は「こんなことは外国人に判るわけがない」などと、自分達の文化を世界の人々に理解させる努力を怠りがちだが、今回のことは、一生懸命説明すれば、日本文化の意義と存在価値を世界の人々に認めてもらえるということを示した良い例であろう。

(風流月人)

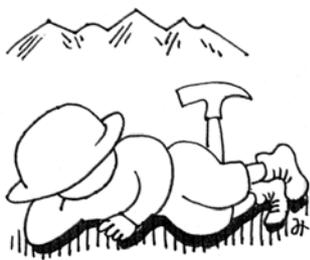
## 古希の気分



までということか。

1300年ほど前の中国は唐の時代。58年で生涯を終えた杜甫である。人生70年は、めったには望めない希なことだったのだろう。しかしそれも、今は昔。高齢社会の現在、70歳の特別感はどうすい。

さて、年齢（とし）相応に、話題はついつい、互いの病気自慢の様相を呈し、情報の交換へと展開。それで、いたわりの言葉をかわしつつも「まあ一杯」。



あのオジサンには困ったよな。あのオジサンとは、スキーヤーで冒険家の三浦雄一郎さん。80歳世界最高齢でエベレスト（8,848メートル）登頂に成功。

三浦さんをごらんささいってハッパかけられちゃって、いい迷惑だよな、と

古希。じゃあ、今年はパーッといこう！のかけ声で、一晩泊りの大学のクラス会に出席した。すでに鬼籍に入った友人もチラホラあれば、「人生七十古来希なり・杜甫」よくぞ70歳

また一杯。酒は百葉の長、飲みすぎなきゃいいのさ、でさらに一杯。まま、さささ・・・さしつ、さされつ。もう十分飲み過ぎなんですけど。

学友達70歳の現況といえば、いまだ現役の者、今や家庭菜園での晴耕雨読を楽しむ者など、それぞれである。

ところで、演奏家の引退時期を問われた。もちろん仕事としてのそれだ。仕事の依頼がなくなった時かな・・・と、とりあえずは応じたのだが・・・。

それで思い出したのが、ピアニスト・ホロヴィッツ。ピアノの巨匠として熱望されて、初来日。その時80歳。その演奏、期待はずれで「ひび割れた骨董」など昔日の面影とはほど遠い散々な評価。すわ引退か、と。

ところがホロヴィッツ、このままでは終わらず、捲土重来3年後の再来日で名演奏を披露。名誉を挽回したのだった。そして、その3年後に亡くなった。享年86。これなぞ生涯現役というのだろう。立派だ。



しかし、これに驚いちゃいけない。ピアニスト室井摩耶子さん（92歳）が、現役で活躍している。「年齢を重ねて、“得たもの”と“失ったもの”を比べれば、“得たもの”の方がずっと大きい。若返るなんてもったいないわ」（サライ2013年7月号）などと意気軒昂でピアノに向かう。一度、是非その円熟を拝聴したい。

国連の「世界人口展望」によると、2100年の日本は、平均寿命94.2歳になるとのことだ。そのころには、100歳の現役演奏家も珍しくはない、ということになっているのかもしれない。



人のことは、いい。君はどうなの？そうか、私の場合……。演奏家などはおこがましい

が、そろそろかな。声だけでなく、頭脳の方も少しね……。

求められるうちが華と続けてはいるものの、そろそろ体力にも自信がもてな

くなってきている昨今。引退の文字も目の前で点滅する。

コワレタラッパ！と評される前の見きわめ、自己申告、これが存外難しい。まあそのうちにね。で、また一杯ついでもらおう。

そんなこんなで、古希の夜は更けて。互いの健闘を称え盃を重ねながら、メンバーが2人になるまでの会の存続を、確認しあうのだった。

さて、先ほどの三浦さん。「今度は85歳でヒマラヤをスキーで滑りたい」



んだって。チヨーオユー（8,201メートル）が新たな目標という。

雪焼けの顔をほころばせ、マイク

をにぎっている記者会見の写真を、新聞で見た。どうぞもう、お好きなように。何でもやってくださいまし。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声乐を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。



【挿絵】武田 光弘（たけだ みつひろ）



## 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第40回〕

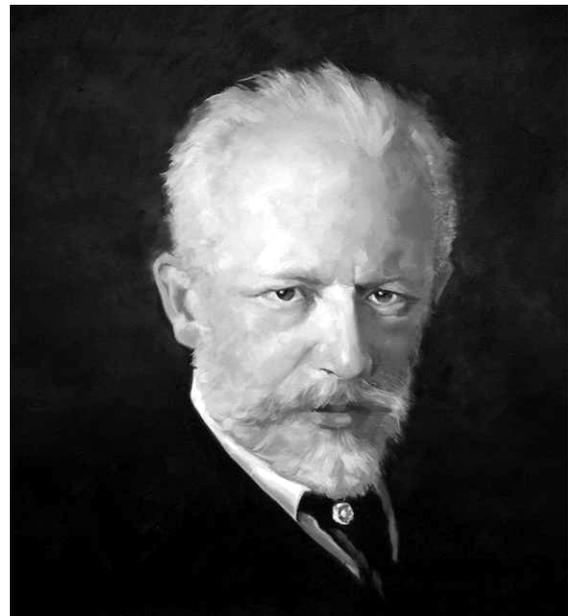
演奏会で聴く時には要注意！な曲

音楽を聴くといえば、演奏会場へ出かけて聴く「ナマ演奏」か、CD・テープ・ラジオなどの再生装置によるか、のどちらかによってである。どちらがいいかといえば、これは多分、ナマ演奏の方がいい、という人が多いだろう。なんといっても演奏者と直に接し、彼らが発する音（楽）をそのまま耳にするわけだからである。やり直しのきかない一回限りのスリルや興奮も味わえる。時には予期せぬハプニングもあるし、演奏者と聴衆との一体感も味わうことができ、とにかく楽しい。

それに比べれば再生装置によるものは、加工もあるだろうし修正もあるだろう。多くはスタジオ録音だから演奏会場のような雑音や曖昧な音はないけれど、どこかしら作られた音という感じが否めず、何よりも再生装置の性能がさまざまだ。よほど高級な装置によらない限り、そしていい雰囲気では聴かない限り、ナマに近い満足感は得られないかもしれない。

というわけで、入場料の高いこと、レパートリーの狭さなどを越えてナマの演奏会へ出かける人は多いけれど、しかし大勢がいっしょにという手前、気をつけなければならないことも多少はある。遅れて入場するとか音を立てるといったマナー上の迷惑に気をつけることはもちろん、演奏される曲目についても、知っていた方がよい注意点というのがある。

それは、作品や演奏者に対する思い入れが強い場合にしばしばやりがちなことなのだが、感動のあまり演奏が終わったと思ってやる「ブラヴォー！」（見事、素敵の意味。女性演奏者の場合はブラヴァー。複数の場合はブラーヴィ。特にイタリア系演奏家の場合に注意）である。あるいは声でなく拍手をする場合である。じつはそのタイミングについて、気をつけなければならない曲がいくつかあるのである。知らずに声をかけたり拍手して気恥ずかしい思いをしないために、どんな曲が該当するのか、ちょっとご紹介しておこう。ただし規則ではないので、深く拘る必要はない、とお断りした上で。



チャイコフスキー（1840-1893）

まず一つは、曲の終わりがはっきりしない、いつ終わったのかわかり難い作品である。その代表は何ととっても、チャイコ

フスキーの交響曲第6番「悲愴」である。死の9日前（1893年10月28日）にペテルブルグで初演されたこの曲は、定型どおりの4楽章から出来ているが、通常ならアレグロやプレストで華やかに締めくくるべき終楽章が、なんとアダージョ・ラメントーソ（悲しみのアダージョ）という、ゆっくりとした重苦しいスタイルで書かれている。特に最後の部分は聞こえないほどの最弱奏で終るようになっているから、聴く人にはどこで拍手をしたものか、きわめてわかり難い。指揮者に注目し、タクトが置かれた時、あるいはふり向いた時に拍手！ということになるだろう。交響曲では、同じチャイコフスキーの「第5番」や、マーラーの「第4番」「第9番」「大地の歌」、ブルックナーの「第9番」（未完）なども、そう。同じような静かな終わり方をするから、気をつけた方がよいだろう。

交響曲以外では、ホルストの組曲「惑星」（女声合唱によるヴォカリーズで、消えるように終る）、ドビュッシーの「夜想曲」（これも人魚を表わす女声ヴォカリーズが波間に消えていく）、同じくドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」（半獣神が眠りへ入っていくようすを、ハープとホルンが弱奏で）、ラヴェルの管弦楽版「なき王女のためのパヴァーヌ」、バーバーの「弦楽のためのアダージョ」、

シベリウスの交響詩「トゥオネラの白鳥」「悲しきワルツ」、ストラヴィンスキーのバレエ音楽「ペトルーシュカ」、R.シュトラウスの交響詩「ドン・ファン」――などが、いずれも静かな終わり方。要注意である。

次は、終わったかと思って拍手をすると、まだ続きがあった――という作品。おなじみなのは、ウェーバーの「舞踏への勧誘」だろう。ある舞踏会で紳士が婦人にダンスを申し込み、同意を得てワルツを踊り、終って礼を述べるという場面を音楽化したもので、原曲はピアノ曲だが一般にはベルリオーズによる管弦楽編曲で親しい。ワルツの終りがいかにも華やかなので、ついそこで拍手をしたくなるが、もう一度冒頭部分に戻るという仕掛け。今でも間違える人が、時々はある。似たような曲は、R.シュトラウスの交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら」、ケテルビーの「ペルシャの市場にて」、ヨハン・シュトラウスの「常動曲」なども、そうである。

そのほか、立ちあがって聴く習慣のヘンデル「ハレルヤ・コーラス」や、原則として終っても拍手をしない「レクイエム」（モーツァルトほか複数の作曲家にある。葬儀用の音楽だから）なども、要注意！知っておくとよいだろう。

---

**【宮本英世氏プロフィール】**1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



【連載】

# 音盤奇譚

板倉 重雄

第45回

## ヴァイオリニストの中のヴァイオリニスト

2013年6月、ロシア出身のヴァイオリニスト、マキシム・ヴェンゲーロフ（1974～）が東京で3晩の演奏会を開催した。現役のトップ奏者だった彼が、右肩の故障を理由に突然引退したのが2008年。幸い故障も癒え、一昨年あたりから演奏活動を再開していた。



初日は広上淳一指揮東京フィルとのベートーヴェン／三重協奏曲とブラームスの協奏曲。彼の音は突き抜けるような輝きをもっており、その解釈は奇をてらうことがない。両曲とも広上との共同作業が見事で、とくにブラームスではオケにかき消されがちなソロとオケの「対話」が伝わってくるのに感じ入った。自作カデンツァはブラームスのパガニーニ風変容といった内容で、その超絶技巧のスリルに圧倒された。はめ込み部品のようなヨアヒムのカデンツァへの

批評でもあったのだろう。

二晩目はパピアンのピアノとのデュオで、前半がヘンデルのソナタ第4番、ベートーヴェンの第10番、後半がフランクのソナタとサン＝サーンスのハバネラ、序奏とロンド・カプリチオーソ。まったく彼は、流行に惑わされることなく、純粹に音の美しさや鋭い技巧を追究し、まるで天から授かったような美しい音楽を聴かせる人だ。ヘンデルとハバネラは彼のデビュー盤の曲目でもあり、彼の本質が少年時代から変わらないことを示している。

三晩目はバッハの二重協奏曲、チャイコフスキーの協奏曲、リムスキー＝コルサコフの《シェヘラザード》。チャイコフスキー以外は彼の弾き振りだった。モダン楽器によるリッチな響きのバッハは、彼が時代考証よりもモダン楽器&奏法の美を優先していることを物語っていた。チャイコフスキーでは、彼の音色美、技巧の冴

え、逆る様な表現に圧倒された。《シェヘラザード》のソロは別格的な美しさ。スケールの大きさと繊細な表現力を併せ持った指揮も素晴らしかった。まさにヴェンゲーロフこそ、イザイやクライスラー以来のヴァイオリン演奏の美の継承者なのだ。

●ヘンデル：ヴァイオリン・ソナタ第4番ニ長調 Op. 1-13 ●メンデルスゾーン：歌の翼に（アクロン編） ●バッツィーニ：妖精の踊り ●サン＝サーンス：ハバネラ ●エルンスト：夏の最後のバラ

マキシム・ヴェンゲーロフ (vn)

イリーナ・ヴィノグラードワ (p)

[旧ソ連・メロディア C10-24759 (LP)] 【写真 前ページ】

1986年録音。ヴェンゲーロフ12歳のときのデビュー盤。1988年に初来日。キーンやレーピンと同様、世界的なデビュー前から日本で演奏会を開いていた。



●バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番ニ短調

●ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ第9番《クロイツェル》

●ヴィエニャフスキ：スケルツォ・タランテラ ●ブラームス：ハンガリー舞曲第1番

マキシム・ヴェンゲーロフ (vn)

イタマール・ゴラン (p)

[キングインターナショナル

KKC5292] 【写真 左】

2012年4月5日、ロンドン、ウィグモア・ホールでのライブ録音。彼の復帰を待ち望んでいた満員の聴衆を前にしての演奏。復帰後の初録音である。

.....  
**板倉重雄氏プロフィール】**1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



# 私と、ラジオ・ドラマ

連載第 12 回

作曲 助川 敏弥

## 「おそくとも十一月には」～特殊楽器について

特殊楽器とはクラシック音楽の通常の編成に含まれていない楽器のことである。

ドラマの音楽では、劇的表現のため、こうした特殊な楽器が必要になることがある。前回、「青幻記」でオカリナを使用したことを書いた。

そのほか、プリペアド・ピアノも使用した。これは大岡昇平の「俘虜記」であった。

主人公は敗走中、気を失って倒れ、アメリカ軍に発見された。そして米軍の俘虜となる。異常な場面である。そのほかにも、「俘虜」という、通常の生活では考えられない状況の中での人間心理と光景の場面がある。通常楽器の音色では描き出すことには限界があった。そのため、この、ジョン・ケージ考案になる特殊加工の楽器を使用したのである。通常ピアノの弦は二本か三本あるが、その複数弦の間に消しゴムとか貨幣をはさむ。響きは異常となる。その変化した音色を使用する。当然、正常な楽器にとっては余り歓迎すべき扱いではない。NHK では、プリペアド用ということで、そのための特別なピアノを用意してあり、それを調達してもらった。もちろんグランド型である。ピアニストは、現代曲の専門家ということで樋口洋子さんに来てもらった。彼女はそれ用の小袋から小道具を取り出して準備した。貨幣は、五円、十円、百円、いろいろ試したが、なかなか厚さ大きさが最適というものがない。樋口さんによれば、米国貨幣のセント硬貨、つまりコインがいいのだそうだ。なるほど、ケージはアメリカ人だから、セント貨幣を使用したであろうし、それが最適なのであろう。しかし、ここは日本だから仕方がない。日本の貨幣で間に合わせてもらった。結果は意図したとおりで、この文学の心理描写には成功したと思っている。

最も特別な経験をしたのは別のドラマである。当時の西ドイツの作家、ハンス・エーリヒ・ノサック原作の「おそくとも十一月には」。ノサックは当時、西ドイツでは人気のある作家であった。死者のモノローグの型で記述する特異な文体の人である。

この仕事は、竹内日出男さん制作だった。物語は、当時の西ドイツの経済的繁栄を背景にしたもので、鉄鋼会社の若手社長の夫人の不倫ものということになる。夫

人は、ある機会に知りあった若い独身の詩人と突然家を捨てる。駆け落ちである。夫人役は伊藤幸子さんであった。この夫の父親、つまり夫人の義父の役を演じたのが、巖金四郎さんであった。これがなかなかの当たり役であり、巖さんも名演であった。竹内さんは、「これはジャンヌ・モローあたりの役だろう」と語っていた。

ここで使用したのが、珍しい楽器である、「musical saw」、訳せば「音楽ノコギリ」である。この甘く、しかも幾分退廃的な物語には、いわば、フランシス・レイ的な音の世界が適応するものだろう。しかし、通常の楽器では、それこそレイの世界そのままで通俗映画ものにしかない。そうならないために構想したのが、特殊な表現の楽器である musical saw であった。

私にとってこの楽器ははじめてであった。それまで目撃したこともない。インスペクターの柳田裕子さんに専門家を呼んでもらった。この楽器は、かつて、黛敏郎さんが、映画「赤線地帯」で使用し、映画評論家の津村秀雄さんと、その是非について雑誌か新聞で大論争したものである。因縁つきのものである。私が目撃するのもはじめてであった。まことに不覚な話だが、目撃の印象も記憶が薄くなってしまった。

結果は当然ながら、音色が独特なもので通俗の世界から離れた得意な幻想性を持っていた。しかし、困るのは音程が不安定なことである。ある音から次の高さの異なる音に移動する時、どうしてもグリサンド、ポルタメントになってしまう。お化けのヒュー・ドロドロになってしまう。近似の音色を探せばエレクトーンがある。事実エレクトーンも併用したがやはりそれだけというわけにはいかない。エレクトーンだけのフレーズはいかにも通俗的な音楽になって、ひとあじ凝った心理描写というわけにはいかないのである。なるべくグリサンドが入らないように演奏の努力をしてもらった。そもそも、絃楽器に例えれば指一本で旋律をひいているようなもので、原理的に無理なものであることが推察できた。現在ではアニメの音楽で有効利用されているかもしれない。

主人公であるこの愛人二人は、その後、車で走行中、橋に激突して死ぬ。すでに死者となった二人のモノローグの型で物語が進められる。最近になり、この原作を図書館で借りて読んだ。かなりの長編である。これだけの長いものをよく一時間のドラマにまとめたものと感心した。昨年、制作者の竹内日出男さんと久方ぶりに再会した。この仕事の話をした。なつかしい作品である。日本と西洋との人間関係の違い、社会と人のあり方の違いにあらためて知るものが多々あった。

(すけがわ・としゃ 本会 代表理事)

## グラミー賞受賞のローランド創業者、梯郁太郎

研究：阿方 俊

第55回2013年度のグラミー賞をローランドの創業者で公益財団法人ローランド芸術文化振興財団の梯（かけはし）郁太郎理事長（83歳）が受賞した。グラミー賞は、音楽業界のアカデミー賞といわれる世界最高の音楽賞であり、アメリカの音楽業界における最大のイベントでさまざまな賞がある。中でも「年間最優秀レコード」「年間最優秀アルバム」「年間最優秀楽曲」「最優秀新人」は、主要4部門と言われ毎年もっとも注目される賞である。この中で梯郁太郎氏がアメリカ人のデイヴ・スミスと受賞したのは、テクニカル・グラミー賞。



受賞の理由は、メーカーを問わない電子楽器の世界共通言語といえるMIDIの制定に尽力し、MIDI規格がその後の音楽産業の発展に貢献したことが評価されたものである。この分野での受賞者には、トーマス・エジソン、シンセサイザーの生みの親ロバート・モーグなどの有名人がいる。日本ではソニーとヤマハが法人として受賞しているが、個人としては今回の受賞がはじめてである。

梯氏については本誌1月号の連載-1で言及しているが、ここで改めて氏のユニークな楽器との関わりを紹介したい。内容は、日本電子キーボード音楽学会の基調講演のために行われたインタビューから要点を抜粋。

写真は、蓄音機をかたどったグラミー賞のトロフィー

### 1. 楽器作りの動機は音楽への目覚めが遅かったため

阿方：どういきっかけで楽器製造をはじめたのか。

梯：第二次世界大戦後の電子という言葉もなかったころ、ラジオが普及して私たちは急に西洋の音楽に触れることができるようになった。当時10代の後半で年齢的に音楽を始めるには遅かったので紆余曲折の末、楽器を作る側に入っていった。

阿方：昭和30年代初期は、ヤマハ、ビクター、東芝など大会社が既に電子オルガンを作ろうとしていた時代。業界入りには一大決心を必要としたのではないか。

梯：楽器業界、世界の音楽業界がどういう状態にあるのかをまったく知らなかったからできた。ラジオで聞いた「鐘の鳴る丘」や「君の名は」のハモンドオルガン独特の音が耳に馴染んでおり、そのコピー音を出したいと手作りで電子オルガン製作を始め、知らない間に楽器製造に入り込んでしまった。

### 2. 電子オルガンの基本は、魅力ある楽器づくり、クラシックとライブ

阿方：まさに趣味が高じて、まわりを知らずに楽器を作っていたことは驚きである。ローランドの楽器作りのコンセプトは何か。

梯：アメリカで電子オルガンが下火になったのは、魅力のある電子オルガンを作らなかったため、マーケットの事情とはあまり関係がない。良い楽器を作りさえすれば、人は戻ってくる。電子オルガンの一番の基本がクラシックである、という原点さえ外さなければ、ジャズ用でもロック用でもホーム用でも成立する。

**阿方**：電子オルガンでは事前に音楽情報を打ち込んだ演奏もあるが、ローランドの電子オルガンはリアルタイムでの演奏に特化しているのか。

**梯**：どちらも必要だが、しかし感動するのはライブ。ライブの経験無しではレコーディングした音はそれ以上のものにはならないが、ライブの下地があればいろいろなイメージが浮かんでレコーディングした音楽でも音楽的イメージが膨らんでくる。ライブで印象の強い素晴らしい音楽を出せる楽器を作ることが第一である。音楽制作の上では、音楽をデータとして扱う必要も出てくる。私たちは電子楽器の共通言語である MIDI 規格を開発し、世界に公開して皆が同じルールで作業ができる環境を提供した。ノンリアルタイムの世界では MIDI は貢献してきた。しかし、楽器を作る以上は魅力的なライブ演奏ができるということを重視している。

### 3. 今後の楽器の進化、人間性を備えた楽器



**阿方**：ノンリアルタイムな音楽制作での MIDI 規格の開発でグラミー賞を受賞されたが、電子オルガンではライブ性に重きを置いており、ローランド社ではその両方を追求しているのが理解できた。今後の電子楽器の進化と社会との結びつきをどのように考えているのか。

**梯**：電子ピアノでは、サンプリングされた音が、音の写真として繰り返し出てくるような方法でなく、生楽器がもつ不規則性やムラといった人間のアナログ的な感覚に寄り添うようなデジタルピアノ製作を目指したい。すなわちアコースティック楽器が有するすばらしい面をもったデジタルピアノを作っていきたい。

昔の音楽ファンは音楽鑑賞と言えはそれなりの雰囲気のある場所で楽しんでいたが、現在は 90 パーセント以上の人が車の中で音楽を聴いている。車がオーケストラの音楽を聴く最適の場所であるはずはないが、一度ライブでナマの

感激を味わえば、車の中で聴いても感激を呼び戻せるし、歩きながらでもエンジョイできる。また、今は音楽と映像を一緒に楽しむこともできる。テレビでオーケストラの音楽を聴いていても、一昔前と違い昨今では映像の切り替わりが音楽の進み具合とタイミングがちゃんと合っている。楽譜を読める人がそういう調整をしている。視覚と聴覚は切り離せない。我々は楽器だけでなく、視覚も含めた分野を手がけて楽しさを提供していかなければならない。

上の写真は、6月12日、大和田伝承ホール（渋谷区文化総合センター）で受賞記念のトーク／梯郁太郎とコンサート New Essential Collection - のチラシである。当日の会場は満席で、シンセサイザーの富田勲、ジャズピアニストの前田憲男、作曲家の千住明など著名人の顔も多く見られた。筆者も梯氏のトークとコンサートを聴き、改めて“まず、音楽ありき”の巨人であることを再認識させられた。

（あがた・しゅん 本会研究会員）

## (21) 福島日記 作曲 小西 徹郎

### ドラマー 神保 彰 氏の音楽世界



5月24日金曜日、埼玉県の鶴ヶ島は今日もハレだった！私はこの日、誰もがご存知のドラマー神保彰さんの「ワンマンオーケストラドラムからくり全国行脚2013」ライブを観に埼玉県は鶴ヶ島市にある「鶴ヶ島ハレ」に伺った。神保彰さんといえば私が小中学校のときにとってもよく聴いていたカシオペアのドラマーだ。そしてこのお店の「鶴ヶ島ハレ」の”ハレ”はカシオペアのアルバム「Halle」からきている。オーナーの今淳一（こん・じゅんいち）さんはカシオペアの大ファンなのだ。とても気さくで明るくて音楽にまっすぐな今さん、沖縄料理のお店でもある鶴ヶ島ハレはまさに”晴れわたる”沖縄の空のイメージである。



左より枝川光孝 氏、筆者、神保 彰 氏

お店に入りシークワサージュースを飲んでいると友人からメールがきた。この友人の名前は枝川光孝君。枝川君は小中学校時代の同級生で神保彰さんのドラムテックをもう25年もつとめる大ベテランのプロなのだ。枝川君は中学時代は野球少年だったが高校に入りドラムを始め高校卒業後に走行している神保彰さんの車を無理やり止めて弟子入りし、そこから本人もプロドラマーとして活動しながら神保さんのドラムテックも

つとめるようになったのだ。彼の活躍は目覚しく鬼才ドラマー、テリー・ボジオからの熱い依頼でドラムテックをつとめることにもなった。まっすぐでやさしくて本当に素晴らしい人柄で魅力ある枝川君なのだ。枝川君が手招きをする、しばし懐かしい話を して楽屋に案内してくれて神保さんに引き合わせてくれた。神保さんにご挨拶をし Wasabi のCDを渡し30年ぶりの再会と小中学校時代の枝川君について神保さんともお話をした。

いよいよ楽しみにしていたライブが始まった。このライブのタイトル「ワンマンオーケストラ」そして「ドラムからくり」このキーワードは本誌読者の方もとても興味深いと思う。生ドラムにシンセサイザーサウンドでオーケストレーションされたサウンドで音楽が繰り広げられる。何故一人でドラムを演奏して



いるのにオーケストラになっているのか？コンピュータでの打ち込みなのか？いや、実はすべて神保さんの生演奏なのだ。シンセドラムパッドでメロディの音列をプログラムしリズムにあわせて叩けばメロディになりまた別のパッドを叩くとハーモニーが仕込まれている。そしてフットペダルやアコースティック部分のドラムにもセンサーが仕込まれており演奏していてシンセの音が出る、そういう仕組みだ。このパッドとすべてのセンサーを操りドラムを叩きながらメロディもハーモニーも副旋律もすべて両手足で演奏する、そしてプログラムチェンジをスティックで叩き行う、とても驚きと新鮮さに満ちた感動があるのだ。そして曲数も今では300曲を超えるほどになったとのこと。そして何よりも素敵なのが選曲。ベートーヴェンからガーシュイン、デュークエリントン、E W & F、ビートルズ、そしてカシオペア、そしてオリジナル。ただでさえ神保彰大ファンのお客様は更に大喜びの選曲なのだ。そしてこのライブの素晴らしいところは神保さんとお客様との距離、本当に間近で演奏を観て聴くことができるのだ。そのためドラムを中心に360度に客席が置かれた「パノラマ・ライブ」なのだ。私は斜め後ろから聴いていたが神保さんの姿勢のよさにはとても驚いた。まったく軸がブレない演奏姿に惚れ惚れした。お客様は私と同世代の方を中心にドラムを学んでいる10代20代の若者も多く会場は熱気にあふれ真剣な眼差しで食い入るように演奏を観聴きしていた。そして音楽ファンにとってはこの上ない極上の音楽時間であったことはお客様の表情をみていると伝わってくる。



神保さん

私にとってもとても幸せな時間であった。そしてこのとても勢いのある全国ツアー、これを企画、計画していくことは非常に難しいし大変な労力である。神保さんの全国ツアーをブッキングした株式会社ハンズオン・エンタテインメントの大槻秀明氏、彼の支えがあって実現している。全国の各会場のスタッフやオーナーの方々、そしてブッキングをされた大槻さん、神保さんの演奏を支える枝川君、そして神保さん、この素晴らしい人間関係と信頼関係、そして観客であるお客様、皆が一体となってよき音楽空間は生まれているのだと心から実感した。

こここのところ流れているはずのものが流れなかったり精神的苦痛の中すごしてきたがこの日は神保彰さんの音楽、枝川君の素晴らしい仕事、そしてお二方の確固たる揺るがぬ信頼関係、そしてお二方のやさしくまっすぐな人柄に心を救われた思いである。本当に心より感謝している。私も人に感動と美しさを伝えられるアーティストでありたい。そう思い襟を正した一日であった。

(こにし・てつろう 本会理事)

挿絵：前川久美子（まえかわ くみこ）山口芸術短期大学 在学中

# 《明日の歌を》 — 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第七回 MITTENWALD 稲原和雄氏に訊く「MITTENWALD レーベルができるまで」



情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

七回目は、約 10 年間弦楽器 CD 専門店を経営し、自らミッテンヴァルト・レーベルを立ち上げ日本人作曲家を取り上げている稲原和雄氏に、「MITTENWALD レーベルができるまで」と称して、3 年振りに対談形式でお話を伺いたと思います。

## ■稲原和雄（いなはら・かずお 「MITTENWALD」代表）

1948 年兵庫県伊丹市生まれ。近畿大学理工学部卒業。大手食品メーカーに勤務。1998 年会社都合により退社、同年「ミッテンヴァルト」設立。当時無名だったヴァイオリニスト川畠成道氏と初 CD 制作をする。毎年文化庁芸術祭レコード部門に数多く出品する。

現在、邦人作品を中心に 50 タイトル制作。全国有名レコード店で販売中。

〈Website〉 <http://homepage3.nifty.com/mittenwald/>



## ■橘川 琢（きつかわ・みがく 作曲家・日本音楽舞踊会議理事）



作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。平成 17 年(2005 年)度(第 60 回記念)文化庁芸術祭参加。2006 年・2008 年度文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が、採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。

〈Website〉 <http://www.migaku-k.net/>

—— MITTENWALD (ミッテンヴァルト) ……弦楽器が好きな方なら、そして日本人作曲家のファンならどこかで耳にしたことがあるのではないだろうか。ドイツの有名なヴァイオリン製作地の名を冠した、池袋にあったのこの店の名前を。所狭しと並んだ、弦楽器と、日本人作曲家の CD を中心とした品揃え。関西弁全開で話す、おだやかで気さくな店長。在京オーケストラのコンサートマスターなど、プロから多くの弦楽器ファンまで集うお店として有名だった。

また「日本楽派」のシリーズなど、日本人作曲家の録音を多く出している「ミッテンヴァルト・レーベル」でも知られている。(2010年6月号引用)

2010年5月末日、12年続いた店舗は惜しまれつつ閉店したが、日本人作曲家を中心とした録音・レーベルはまだ続けている。筆者も1999年より通っていたこの店。前回対談より3年が過ぎた。14年目の付き合いとなる店長の稲原和雄氏に再びお聞きした。

■ CD店・レコーディングのミッテンヴァルトを起業するまで・・・それは学生の頃出会った本から

——ミッテンヴァルト (MITTENWALD) という一風変わったレーベルと、弦楽器専門店を立ち上げる契機というのはどのようなものだったのでしょうか。ヴァイオリンで学生オケに所属しその後も演奏を続けるほどヴァイオリンがお好きだったと聞いていますが・・・

「それは無量塔 (むらた) 蔵六著『ヴァイオリン』 (現：岩波新書 1975) を学生時代に読んで、ドイツの MITTENWALD を知った時からだね。無量塔さんは日本で初めてガイゲン・バウ・マイスターの資格を取得した方でね。感銘と刺激を受けて、1970年代学生の終わりに、その MITTENWALD を訪問した。」



1970年代、ドイツ MITTENWALD にて

——なるほど。

「その後、大手食品メーカーで会社員をしながら、会社の本社があるイギリスに研修に行って。それが1990年代。その帰り、一人 MITTENWALD に立ち寄った。

その後、会社で早期退職制度が出来たから、思い切って会社を辞めた。その資金を元に立ち上げたのが、弦楽器 CD 専門店ミッテンヴァルト。しばらくしてから、自分でレーベルを作ろうと思って立ち上げたのが、ミッテンヴァルト・レコード。」

■ 音楽を仕事にすること・・・世相と理想とのはざままで

—— (事務所の FAX やオーダー表を見ながら) ずいぶんオーダーが来ていますね。電話やら手紙やら、メールやら、ネットやら・・・。ミッテンヴァルトの店舗は無くなりました (2010年5月末閉店) けど、事務所での対面販売や通信販売、そしてミッテンヴァルトレコードはちゃんと継続しているの



1990年代、ドイツMITTENWALDにて

ですね。3年前を思えば、それが何よりも嬉しいです。

ところで店長との付き合いの長さから聞いてしまいますが、正直、商売としても大変なのでは？ CDショップでCDを買う人が減っている中、ミッテンヴァルトも店舗部分を基本的には閉めたわけですし……。

「いやあ、大変は大変。でも、ちよとずつは続いているよ。最近

ではAmazonにも委託するようにして、そちらがやはり売れているね。それこそネット注文で、動かずにピンポイントで注文できるやり方も浸透しているんだろうね。自分達（販売側）も恩恵を受けているくらいだから。

——かつて中古CDを買うとき、神保町のCD屋さんを「回遊魚」のように巡回して回る出会い方、買い方をしている人たちがいましたね。さまよいながらたまたまCDやさんで聴いたBGMが生涯の5本の指に入るような録音との出会いになっていたり……。そういう、人と、音楽と、そして同好の士との人間的接触が減ってはいますね……。

「まあ本当はこれまでやってきたように、話をしながら興味を持ってもらって、現物を手で触っていただいて、出来れば試聴してもらってから購入していただけるような……サロンの雰囲気と関係が好きなんだけれどね。これは仕方がないかな。」

## ■ネットの時代に、こうしてCDや雑誌を作るとのこと……リスクと希望

——制作サイドの話になりますけれど、今50タイトルを越えたミッテンヴァルトレーベルのCD、企画を立て、構想を練り、レコーディングしてリリースするのに、どれくらいかかりますか？

「平均2-3年かな。長ければ10年ということもある。依頼を受けてミッテンヴァルトで出す場合、お金は気にしなくていいから助かるけれど、特に自分の出したいものに関しては資金提供をどこからも受けていないから、自前で資金が出来てからようやく始められる。だから、3-10年かかってしまうこともあるね……。」

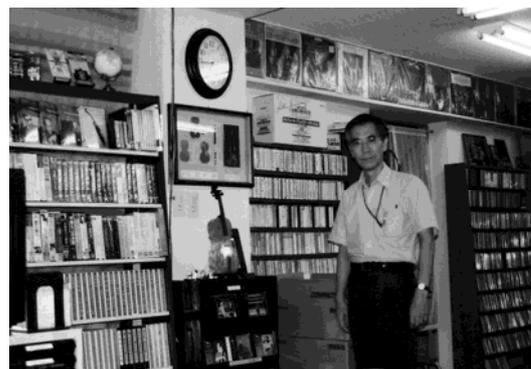
——なるほど……。私たちのような月刊誌も、ネットが発達して、文章がどんどんアップされている時代。自分で好きなものをブロードキャストできる、「無償の文化」が良くも悪くもこうして席卷し始めると、費用も時間もかかるレコーディングや編集出版の意義や意味を見つめざるを得ないと思います。この辺りはいかがでしょう？

「その編集に意味とか意義があると思うよ。大切なのはね、何でもかんでも発表すればいいというものではないということ。『これは絶対に後世に残さなければいけない。私費を、人生の時間を投じてでも！』というものを、時間や手間を惜しまずかけて作ってゆくこと。」

勿論、過程においては独りよがりには陥らないためにも、専門家にも相談して、意義に関してご意見を伺う。その中で、ふるいにかけてられるものだって多い。だから、発表する側は、『発表したい』という思いだけでなく、世に送る前にふるいにかけてる側として責任の重さをいつも感じないといけないと思う。」

——確かに。今、この玉石混交状態は面白くもある一方、まだどこか頼りなく感じることもあります。それは、それぞれの「私（わたくし）」というものが、まだまだ無軌道、無制約でネットに広がっているように見えます。新聞やラジオ、TVが時間をかけて作ってきた倫理規定や発表のための基準が、まだ15年ほどのネットの世界では落ち着くまでは出来ていないと思います。

「そうだね。まだ混じりすぎていると思う。自覚と裏づけ、何よりも責任が、個人で発表する世界よりもより厳しいものだろうし、厳しくありたい。これを世に送りたい！という情熱と、厳選して残してゆくということ。どちらも責任を伴う。本当に大切なことだと思う。」



2000年代、弦楽器 CD 専門店ミッテンヴァルト店舗（2010年5月 店舗は閉店）

#### ■なかなか邦人作品に触れない日本人へ

——ところで、3年前、日本人演奏家が邦人作品を演奏しなさ過ぎという話がありました。これはこの3年でどう変わってきたのでしょうか？

「あまり変わっていない。今でも演奏する人は演奏するけれど、しない人は相変わらずしない。先日もアメリカから日本人のカルテットが来て、海外物の CD とかの問い合わせがあって。でも、邦人作品はなかった。『海外で演奏する機会の多い君達は、日本人作品はやらないのか、レパートリーは無いのか』を聞いてみたら、バツが悪そうに黙っていた。」

——うーん、そうでしたか。技術面だけを言えば、アジア諸国の中でも、受賞歴を多く持つ国や人も増えてきています。かつて日本が技術面で西洋に追いついたといわれ、実際コンクール受賞を重ねてきたように。今後は技術の日本人イメージがだんだん薄まってくるかと思います。その次こそが重要ですね。

しかし、これまでの話を一つフォローするとしたら、音源はともかくおおもとの楽譜の入手が困難という事はありませんか？

「それはある。だからこそ、実は音源とともに楽譜を世に出すことは我々もやりたい。でもね、厳しいことを、苦言を呈するなら、楽譜に関しては近代音楽館にいたり遺族の方にお問い合わせするなり出来る。いまではネットでも検索はかなり楽になった。それをしない程度にみんな情熱がない。勉強不足で受け身過ぎやしないだろうか？」

——西洋の一地方で作られてきた文化、その共通の財産だけでずっと進んでいて良いのでしょうか。自分はどこから来た、どこで育った人間なのか。自分の音楽的血肉はいったいどこの栄養で育ったものか。

演奏会では音楽だけを聴いたり、名曲を演奏する演奏家の姿を見たいだけでなく、演奏家「その人」を見たい。演奏を通じて聴こえる声色を聴きたい。音に育ちや経歴が聴こえる演奏家や作曲家でないと、将来「生き残る」だけでなく、そもそも「自分とは何か」「自分の存在の中心核には何があるか」に苦しむのではないのでしょうか。

「だからこそ、邦人作曲家の作品を聞く人が、残す人が徐々にだけれど増えている現状は良いことだと思う。増えているのは確かだよ！」

## ■若い人へ・・・稲原「人生には三回機会がある」／橋川「情熱の伝播を信じる事」

——ところでその・・・15年近くの間、もしかしたら報われないかもしれないという苦勞、相当に大変ではなかったでしょうか？

「好きなことだからね。この世界に進んだ楽しみを思ったら、苦勞を苦勞と  
思ったことはないよ。でも制作費が無くて、いつも困っているけれど。(笑)

それに人生には三回大きな変化のときがあると、個人的には思っている。一度目は  
生まれたとき。三回目は死ぬとき。そしてあと一回。その一回がこれだと思った  
から。」

——なるほど、良い言葉ですね。しかし一度目は選べないですし、三度目はあまり  
予想がつかないですし……。その言葉通りだとしましたら、生死と同じレベルの  
大きな変化とは、実質一度ですね。

「そうだね(笑)。でも、その一回を踏み出す時が必ず来ると思う。私の場合は、  
それがミッテンヴァルトだった。経営的には良い結果だったかはわからないけれど。」

——人生の情熱は、必ず伝播(でんぱ)すると思います。感動的な音楽が、命と  
情熱の言葉として広がるように……。例えば私と一緒に14年前から通っていた  
西耕一君のようなのちの音楽評論家が、店長の熱を正面から受けて邦人作曲の演奏  
会をプロデュースしレコーディングするきっかけの一つとなったり。私自身、作曲  
家としての道を生涯歩み通す覚悟を決めて……。

ミッテンヴァルトに集まる音楽家や愛好家その一人ひとりの進んだ未来から、そ  
してその人たちをもてなし時に一緒に仕事をする店長の姿から、その選択は正しか  
ったと私は信じています。



稲原 和雄

「だとしたら嬉しいね。日本人作品に接するような機会は、私  
たちのような人間が生活を削って、いろんな犠牲を払ってでも  
少しずつでも作って拵げてゆくから。だから自分たちでそれを  
積極的に持ち歩いて演奏してほしい。作曲して欲しい。愛聴し  
て欲しい。」

日本人の作品にも良いものが本当にたくさんある。他ならぬ  
自分達の音楽なんだから、演奏家、作曲家、そして聴き手みん  
なでもっと愛好してもらえれば嬉しい。……。それだけが願  
いだよ。」

(2013年6月15日、池袋MITTENWALD事務所にて)

毎年5月に開催されることが多い日本音楽舞踊会議作曲部会作品展だが、今年は6月14日（金）午後6時20分より、すみだトリフォニー（小）ホールにて開催された。例年より1ヶ月遅らせての開催となったのは、2月18日に作曲部会員が多く参加した、「第2回：動き、舞踊、所作と音楽」の公演があったため、少し期間をおいたためである。本会の作曲部会員が多く関わるコンサートとしては、毎年10月に開催される「様々な音の風景」シリーズがあり、作曲部会の会員数を考えると、年3回、部会員が深く関係するコンサートが開催されるということは、部会活動の活発さを示しているといえよう。他に開催は不定期だが、作曲部会員が多く参加するコンサートとして、エレクトーンの新作コンサート「Compositions」シリーズもある。

今年も作品の様式、楽器編成は多様で、合唱を伴った大編成のものから、歌曲、器楽独奏曲など小編成のものまであり、また楽器もヴァイオリン、ピアノなど洋楽器だけでなく、尺八や箏など邦楽器も使用されていた。個性も主張も異なる8名の作曲者が、自由に自己表現しようとするれば、楽器編成などでも、色々出て来るといふことであろうか。

以下に、個々の作品と演奏について紹介しよう。

① 金藤 豊 Yutaka Kanetoh

静御前に捧ぐる挽歌(2006)

- 1 平家壇の浦に亡ぶ
  - 2 一の谷合戦とみちのく挽歌
  - 3-1 武蔵野を行く静とその情景      3-2 頼朝 義仲 義経のあらそい
  - 3-3 静のなげき      4 静のうたと終曲
- sop. 河内紀恵    上村聡子    栃木篤子    林 志乃  
 mez. sop 金田香織    樺沢わか子    新明裕子  
 alt. 中嶋啓子    甲斐川ゆき子    田中正子    塚越由香里  
 perc. 林瑞穂    pf. 西村晶子    尺八 山下孝太郎    cond. 中嶋恒雄

冒頭の尺八の悲しげな3度音型を語り引き継ぎ、長い音楽歴史物語がはじまる。打楽器のリズムと音色、戦場の兵士達の叫び声を模した合唱の響がドラマチック効果を醸し出していた。ピアノも尺八もそれぞれの楽器の特徴を生かし、この作品の劇的表現力を高めていたが、特に様々な歌い方を要求される合唱パートが作曲者の要求によく応えていたと思った。語りは聞き取りやすく、義経と静御前の悲しい歴史物語をよく知る者なら、退屈せずに聴き通せたであろうが、音楽的には同じモードが長く続きすぎ、冗長に感ずる部分があった。しかし、静御前の物語に対する作曲者の強い思い入れは、こちらに伝わって来た。特に、中嶋恒雄氏の指揮によるアンサンブルの好演が、作品の魅力をより引き出していたといえよう。

## ② 穴原 雅己 Masami Anahara

### 島崎藤村の詩による2つの秋の歌

1. 秋に隠れて (2013) 初演      2. 秋風の歌 (2003)

mez. sop 佐藤まどか      pf. 藤中智香子

最新作と10年前の作品が続けて演奏されたが、最新作は小品のせいもあるが変化に乏しく温和しすぎる感じがした。10年前の作品“秋風の歌”の方は、同じフレーズが何度も繰り返されるが、転調が多く曲想も変化に富み、こちらの作品の方が聴き応えがあると感じた。つまり、そこには新しい世界を開拓しようとする作者の意欲と冒険心があったと思われる。作者はまだ若いのだから、公務員としての日常生活に埋没することなく、勇気を持って己の表現世界を開拓して行って欲しいと願う。それから、ピアノの使い方は華やかだが、余分な音が多すぎるように思う。フォーレの歌曲におけるピアノ伴奏の扱い方など、参考にしてみたらどうだろうか。最後に佐藤まどか、藤中智香子の演奏からは、作品に対する温かい愛情が感じられ、楽しく聴くことが出来た。

## ③ 古澤 彰 Akira Furusawa

### 「No meaning—ピアノと弦楽器のための」(2013) 初演

Pf. 高原渉吾 vn. 柏木かさね vc. 成田七海

調弦の後、そのA音からヴァイオリンが奏で始め、チェロがヘテロフォニー風に絡みながら後を追う。ピアノは分散和音で応答するが、ピアノがリズムを刻み始めると、曲想が大きく変化し、弦楽器は半音階的音型を奏でる。共にリズムを刻むようになると、音楽は内なる感情が噴出するかのよう激しくなっていく。そして緊張感を内包する静寂と、激しいリズムを伴う興奮とが交互に訪れ、最後には静寂に戻り、ピアノが消えるように低いA音を弾き、曲を閉じる。普段は作者に内側に隠れている激しい感情の起伏が、音として表れたように感じられる作品だが、敢えて要求すると。より音楽的な多様性とクライマックスに向かう部分の説得力の強化を望みたい。しかし無駄な部分が少なく、音楽的緊張感が持続していたため、はじめから終わりまで、退屈せずに聴くことが出来た。

## ④ 高橋 雅光 Masamitsu Takahashi

### “ピアノのための「カプリチオ」”(1983) pf. 松山 元

この作品は、一貫してA音を中心にした短旋法を軸に構成され、その軸線に旋法から外れた音を多調的に絡めたり、様々なリズムや多彩な装飾的音型により音楽を紡ぎながら展開していく。松山元は分散和音や音階を名人芸的な速いテンポで華やかに演奏した。テンポは作曲者の要請より速めだったのではないかとと思われるが、

聴き手の側に立つと、メリハリの効いた華やかな演奏により、最後まで退屈せずに聴くことが出来たとも言える。この作品は、装飾的音型、リズムなどの面では変化に富んでいるものの、A音を中心にした短旋律は変わらず一貫しており、演奏のあり方によっては退屈しかねないからである。演奏者が変わると、音楽的にどのような違いが生ずるか、聴き比べてみたいものである。

## ⑤ 中嶋 恒雄 Tsuneo Nakajima

### 小磯仁の詩による「海の約束 女声合唱のための」(2013) 改訂初演

1. 海の黙契                      2. たったひとつの帰郷                      3. 無声の文字

4. 永遠の帰郷                      5. 間奏と終曲－海の約束

sop.          河内紀恵          上村聡子          栃木篤子          林          志乃

mez. sop 金田香織          榎沢わか子          新明裕子

alt.          中嶋啓子          甲斐川ゆき子          田中正子          塚越由香里

pf. 西村晶子                      cond. 中嶋恒雄

1. 最初に演奏された“海の黙契”は、ト長調ではじまり、転調によって曲想に変化をもたらしながらも、終始美しいハーモニーで多くの聴き手を魅了した。この人の作品は、通常の合唱作品と比べて、歌詞がかなりよく認識できる。詩のイントネーションを大切にしている書き方をしているからであろう。2, 3, 5曲目はピアノの導入部は無調ではじまり、その後しばらくは無調で歌われるが、全員による合唱に変わるあたりから調性音楽に変わった。勿論、詩との関連性もあるだろうが、演奏技術面での配慮があったのかもしれない。演奏時間は長かったが、作品も演奏も美しく、音楽を聴く喜びに浸ることが出来た。作曲者自身の指揮と、それに応え美しいハーモニーを響かせてくれた合唱団に、大いなる拍手を送りたい。

## ⑥ 高橋 通 Toru Takahashi

### 「箏独奏ソナタ第8番」(1968)          箏 高橋澄子

この作品は序破急を連想させる三部構成に書かれているようである。箏は調弦にもとづく通常の奏法で出せる音高の種類は限られるが、押し手（左手で弦を押さえる技法）を多用し、様々なピッチの音を奏でていた。この楽章について作者は12音技法を用いたと説明しているが、調性的に調弦されているためか、無調には感じられなかった。第2部は、弦の弾き方を強弱様々に変化させ、響の異なる余韻を創り出していた。第3部は快活なテンポと躍動的なリズム、そして美しい分散和音をともなう華やかな楽章で、多くの聴き手を楽しませた。各部分の楽想がかなり異なり、やや一体感を欠いたように感じたところもあったが、全体的に無駄なくコンパクトに凝縮されており、さらに作者の夫人であり良き伴侶である演奏者が、作品を十分理解し、愛情を込めて隅々まで丁寧に演奏したため、なかなか魅力ある音楽となった。

## ⑦ 北條 直彦 Naohiko Hojoh

作者は自作品の解説のはじめに「この曲は二律背反する内面の葛藤、揺れ動く心理の音による照射であり、・・・」と書いているが、無窮動のような速い音型で始まり、すぐに不協和音程の重奏による正反対の楽想が表れる、そしてまた初めの楽想に戻るといのように、小刻みに対照的な楽想が交差する中で、ピッチカート、シュールポント奏法（弓を駒に近づけて演奏）など、様々な奏法によって生み出された楽想が挿入され、曲が展開されて行く。その音楽からは内面的葛藤、揺れ動く心を表す激しい変化とそれにともなう緊張感が感じられるが、短いサイクルで頻繁に変化するため、長く聴いているうちに聴き手は緊張感が維持できなくなってしまう。大作であるのだから、ゆったりと歌わせる楽想、それと対照的なドラマチックで激しい表現をともなう楽想が、それぞれもっと長目に出現する部分があっても良かったのではないかと感じた。なお、最弱奏のあと、毅然と想いを断ち切るかのように、弓を弦に激しく叩きつけるように引く終わり方は衝撃的だった。

⑧ 桑原 洋明 Hiroaki Kuwahara

『御佛の四つの本願』より (2012) 初演

3. 法門無尽誓願学 4. 佛道無上誓願成

pf. 鈴木菜穂子

今回は、全4楽章からなる『御佛の四つの本願』のうち、第3、4楽章だけが演奏されたが、それでも演奏時間は20分弱だった。「3. 法門無尽誓願学」は急速な分散和音、激しい打鍵を伴うリズムなどの間から、祈りの歌と思えるテーマが幾度も姿を変えて顔を覗かせ、ある時は低音で力強く、ある時は高音でつぶやくように奏される。

『4. 佛道無上誓願成』は、運命を拒絶するような激しい打鍵ではじまり、対照的な16分音符の弱奏による楽想が続く、音は次第に増殖されて行き、高度なピアニズム伴う音型が表れ、やがて読経のような祈りの音楽が挟まる。終わりは阿弥陀仏になられた法蔵を描いているのだろうか、心安らかに盛り上がって曲を閉じる。

作曲者は普段は寡黙な人だが、作品においては多弁である。しかし、真摯な創作姿勢は伝わってくる。鈴木菜穂子の演奏は歯切れがよく、ピアノの音色に対する感性も優れている。ただ、作品の中にある祈りの心をどこまで深く捉えていたかとなると課題が残る。また、聴き手の中には、作曲者の多弁さについて行けなかった人もいるものと思われる。

今回の作品展においては、傾向の異なる8作品が演奏されたが、聴き手の評価は様々であろう。しかし、今を生きる作曲者の作品を、今を生きる演奏家が演奏し、今を生きる聴衆がそれを聴くことには大きな意義がある。

こういう催は、持続することで、存在意義が大きくなって行く。

報告 中島洋一

## シューベルトの「未完成交響曲」を完成に導く為の予備的考察・Ⅱ

奇蹟の引き継ぎは可能か？

作曲：ロクリアン・正岡

本原稿書きの為に借りて来たCD（RCA/ BVCC 38192～95）の解説文に次のようにある（著者：門馬直美）。

かつてイギリスでこの交響曲を完成させる懸賞募集をしたり、また、指揮者のワインガルトナーを始めとして、色々な人たちによって何回か第3楽章以下新たに創作されたことがあったが、やはりシューベルトには力及ばず、そうした補足の楽章は、未だ陽の目をみない。

シューベルトでもない人間が第3楽章はおろか、メモ書き一つ残っていない第4楽章まで完成させるとは創作というか、事実上でっち上げにしかならないのではないか？

未完成の楽曲の完成化を実行しようとする身になれば、おのずとそのような謙虚な気がかりも生じてこようというものだ。

ただ、この場合にはシューベルトのあの「未完成交響曲」なのだ。全号で強調したとおり、ミューズの女神の下で想念を得、第2楽章のかなりのところまで作曲が進められ、終わり近くに

女神の夢から覚めて半ば強制終了したためにその先の楽章の想念を失い作曲が立ち行かなくなってしまうシューベルトなのであった。

ならば、シューベルトに成り代わり、“同じ夢に罹りつつ”現実作業としての作曲を強か進めてゆけばよいだけのことである。

夢を見るのではなく、夢を聴く！しかも、同じものを！  
そんなことできるのだろうか？

### 佐村河内守著「交響曲第一番」（講談社刊）に登場する“運命の少女”

御存じだろう、NHK番組が発端でマスコミやネットで超有名となった全聾（ぜんろう）の作曲家。私はその著作を購入しすぐに読み切ったが、十代後半以降、編頭痛と耳鳴りに悩まされ、35歳にしてまったく外の音が聞こえなくなってしまうとのこと。しかし、ほとんどの人が多かれ少なかれ「現代病」-人工的に大きく歪められた現代の環境とあっては無理のないことだが一に罹り本来の人間性を大きく損ねているだろう中で、その人間性を保ちつつ大きく育てている人間の現存を知り、少なくとも私は大きな喜びと力を頂戴しているところだ。

さて、氏が障害児のためのボランティア活動に従事していることはNHKスペシャル「魂の旋律」でも紹介されていたが、書物には盲児達の施設での不思議な体験が記されていた。

省略を交えながら引用させていただくと（感じを出すため長くなるがお許しいただきたい）-

「当時7歳のしおりは施設一の変わり者で障害のせいもありますが、一筋縄ではいかない気難し屋であまのじゃくな女の子だったのです。ボランティア・スタッフもみな、やや敬遠ぎみでしたし、職員でさえうまく扱えない子供でした。色黒で、暗い目つきをした男の子のような容姿も近寄りたさを増す要因だったと思います。私も最初は敬遠していたのです。～まもなく私は彼女のことを『しお』と呼ぶようになっていました。」

そして、ピアノのレッスンが始まったのであるが—

「しおの口話はとても読みにくいものでした。いつもうつむき加減でしゃべりますし、脳に障害があるために言葉があまり出ず、しかも断片的なのです。」

「ひどくなる耳鳴りの発作のせいで施設になかなか足を運べず、しおと会えない日が多くなって行きました。私の発作が重いと知ると、しおは来る日も来る日も私のために祈ってくれていたそうです。『マモルさんのお具合がよくなって、早く会いにきてくれますように』と。～

私は施設の職員の一人から、しおが入所した経緯を聴き、障碍児となってしまった「運命の日」を知ることになりました。～彼女は幼いころから母親の虐待を受けていました。ある日、浴槽に沈められ、そのとき脳に長時間酸素がいかなかったことが原因で無酸素脳障害となり、知恵おくれ、手足の麻痺、弱視という障害を背負わされてしまったというのです。

それを聞いたとき、私の中に、すべての音を喪(な)くした、あの『運命の日』に見た夢が鮮やかに蘇りました。私が激しく動揺したことは言うまでもありません。私も、しおも、“水中”という共通の地でこと切れ、『運命』を背負ったのです。～」

## 障碍者の超能力か、根源的媒介者「普遍自身」の働きか？

施設に通うボランティアはその日最後の日課として、子供を寝かしつけるため、本の読み聞かせをしていました。しおに読むのはいつもきまって『からすのパンやさん』です。」

彼女は氏に懐くあまり帰らせないためにカラスを指さして「マモルさんがいる」と盛んに言うようになっていたが、あるとき別の一羽を指さしこういいたしたというではないか！

「『じゃあこれは？ほら、トオルさんがいる！これ、トオルさん.....』

彼女の口話を読み取った瞬間、私は目を疑いました。亨(とおる)は20歳で他界した弟の名前です。～彼女は言葉をつづけました。『トオルさん、白いお車に乗ってバイバイしちゃったね！でも！トオルさん、バイバイするのイヤだよ！って、泣いてたね』

『亨さんはどこに住んでいる人？』と尋ねてみました。～彼女がさす方向を目にした瞬間、いままでの凍りついた気持ちが至福感へと逆転しました。

その人差し指は、まっすぐに天を指していました。～」

「しおとの出会いによって、私は脳内に強い覚醒をうながされたようでした。長く忘れていた“生きること”の実感を、彼女が思い出させてくれたのです。」

そして氏は作曲のインスピレーションを得るためだけに盛んに自然の中に足を運ぶようになるのであるが、氏にとって、いつか出来るだろう兄の交響曲が聞けるのを楽しみにしていた掛け替えのない弟「亨」の死については別の個所に次のように書かれている。

「事故は西広島バイパスで起きました。百キロを超えるスピードで競い合っていた二台の車が中央分離帯を越えて対向車線に飛び込み、弟の車を含む三台に衝突。まったくのもらい事故でした。弟の愛車である白いスカイラインは見るも無残に大破させられたのです。」

### 自分自身に幽閉された通常人の根源的「錯覚」

当然ながら守氏としおりとを直接につなげる媒介者というものを想定しなければ、このような出来事は。奇蹟といっても、現実には起きた以上、それは立派な必然的出来事なのである。

近代以降、科学の影響もあって、A) 全体は部分の集積だとか、B) すべては時間経過の中にある、といった人々の思い込みはどうしようもないほど強くなっている。

まず、A) についてだが、人間は60兆個の細胞の寄せ集めでもなければ、楽曲はいくつもの音の寄せ集めでもない。あるのはストレートな全体であり、そこから現象としての部分が意識の前に立ち現れる。作曲ですら、いろいろな知識を総動員して部品部品を組み合わせ全体を組み立てるのが当たり前になっているが、それを反省するためにも「未完成交響楽」は十分検討するに値する。

また、B) であるが、人間が時間の流れを感じるばかりでなく、すべての事象がこの大宇宙も含めて一時点に位置付けられつつ過去から未来へ移動しているというように感じられるのは、人間の持つ時間現出装置に仕掛けられているからである。

人間の意識は過去側と未来側の二つの領域を別物と覚えるのが普通で、未来意識は過去意識より間一髪先行し続けているものなのだ。

いわば人は未来からの風という目に見えぬものをうっすらと感じかけつつ、それが原因となって自分自身を未来の尻尾を追いかける過去の先端そのものと思ひ込む、と同時に原因のほうは即座に忘れる。そしてすべてが自分とともにあると思ひ込む。ここで留意したいのは、現代人も未来からの風を受けつつあるのだが、自分自身や自他関係のほうに気が奪われて、その風を直接的に意識することができなくなっている、という点だ。身体を与えられ、いやそこに押し込められた立場にある者の保身意識のなさしめるわざといえようか。人間が人間として生きるための必要悪でもある、とも思うのは私だけだろうか？ 佐村河内氏もあるいは？ (近代になる以前にあっては、自己中心的意識を軽減する全体感覚、人間を超えたものへの畏怖の念などがあり、意識が時間装置に従順である割合は現代人よりも低かったものと私は想像している)。

### 錯覚から解放されやすい「運命の少女」とシューベルト

しおりにとっての「トオルさん」、シューベルトにとっての未完成交響楽の楽想は、ともに未来からの風なのである。

しおりにおいては、盲者である上に知的障害で通常の意識がもともと薄いところへ持ってきて非常に大きな存在としての佐村河内氏との一体感への熱望が、氏の脳裏に宿る「亨」との共存意識を諸に感受したのであった。目に見えない媒介者がここでも働いている。

未完成交響楽の場合、もう第1楽章の冒頭のテーマが彼がすっかり深い夜の世界に引きずり込まれていることを示している。昼は太陽の明るさでまったく見えないはずの遠い星々がなんと彼には身近に感じられたことであろう。私はここではどうしてもゴッホの「星月夜」を思い出してしまうのだ。視覚障害者でも知的障害者でもない筈のシューベルトの、しかし偉大なる夢にとらえられて半ば茫然自失してしまう彼に、私はやはり一はっきり言おう—精神薄弱に通じる優しさを痛感しないわけにはゆかない。

そうであるのと同時に、普段の彼の作曲での対位法的技術の不足感などの素人くささを感じることはないどころか、普段の彼の曲から受けることのない高度の知性の働きを実感させられる。

その時の彼のうちには、「しおり」と「まもる」の一体化があったのだろう。

かたや全聾、かたや全盲かつ知的障害者の間のなんという知的な交流か。

## 傲慢な視覚に勝る従順な聴覚の特性に注目しよう

その仲人は、やはり目に見えない媒介者であり、それはミューズの女神という形をとることが多い。真の音楽が本来、未来から流入してくることを思えば当然だ。卑近なことだが、人間聴覚に対するつまらない音楽、いや単なる音からして未来からの流入という現象形式を有しているではないか。だから聴従という言葉も説得力を持つ。視覚的になりすぎている人間は聴覚の持つ根源的謙虚さに自分を合わせる必要があるのではないか。視覚の傲慢さから一步引くためにも。

もちろん、人間を外してしまえば、全体には未来も過去もありはしない。永遠とこの刹那とは平然と同居しているのみである。即通しているともいえようか。しかし刹那刹那を生きる人間の立場からは永遠を大いなるものとして未来方向に仰ぐほかはないのである。

## 再び、日本人とシューベルト

かの小林秀雄はシューベルトのピアノソナタ変ロ長調を聴いて「これは、西行の『願はくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月のころ』という歌のようだ」と語ったという。

何という日本男性の正直さであろうことか。「桜」は女神の子宮への入り口以外の何物でもあるまい。シューベルトが日本人の心性に叶うゆえんであろう。

せっかくここまで未完成交響楽の完成のために考察を進めてきたのだから、作曲家らしく、第3楽章、最終楽章のための主題例を用意しておきたいと思う。

シューベルトのことだから無意識に行われたことかもしれないが、第2楽章は第1楽章の冒頭テーマがそのまま高い属音と化し、天高くひばり舞う昼間の明るさが表現されているともいえよう。

残る楽章の主題もその方向で、両楽章の主題は生かしてみよう。ただし、実際に多くの声部を要するシンフォニックな作品にする過程でこれら単一のメロディーもいろいろな声部に振り分けられる可能性は高い。逆に、そうした曲を予想し、それを象徴化する方向で一つの旋律にまとめたもの、ということも出来ようか。

**Allegro vivace** (♩= 180ca.)      **第3楽章 メヌエット主題**

*ff*      *mp*

**Vvivace** (♩= 280ca.)      **第4楽章 ロンド ソナタ 第一主題**

*mf*      **第二主題**      *p*

3楽章のテーマは誰もがお気づきの通り第1楽章テーマそのままをメヌエットないしスケルツォ化したようなものだが、シューベルト自身書きかけたアレグロ主題よりもはるかに面白く音楽的でしかもそれまでの楽章の想念を受け継いでおり、ご本人がもしこのテーマを得ていたならば再び件の女神の子宮に戻れた可能性大だ

とすら思えてならない（ただし、女神裏切り直後のシューベルトではこのテーマとの出会いはなかったのも無理はない）。

### 今も広く読まれている通俗的「未完成」論について

音楽之友社のこの曲のスコアの1948年付け解説文の最後で、辻壮一氏は次のように語られている。

もしユニークであることのみがある芸術品を高貴にするものであるとするならば、この交響曲はおそらく最高の芸術品に成りうることであろう。何となればわれわれはこの曲の中に於いて、実にシューベルトでなくては書けそうにないもののみを聴き、他の作曲家を想起させる何物をも耳にすることができないからである。このようなユニークな、ロマン的な材料を何故に伝統的な交響曲形式の中にとじこめたのであろうか、何故これらの材料の美しさを十分に生かす新しい形式、例えば交響詩曲といったようなものを彼が案出しなかったのであろうか。もしこれが成功していたならば、もっと美しい音楽を我々は持つことが出来たのではなかったろうか。この曲のロマン的な情趣と、それに似合わぬ伝統的な形式とその間の乖離に気がついたときに、上述のような疑問を提出したくなる。しかし私はこの疑問に大した意味をもたせたくない。なぜならばシューベルトの旋律や転調の美しさは、このような形式の中に於いて、その価値を発揮することが出来ると考えているからである。シューベルトのロマン性は決して意識されたものではなく、素質としてのものであり、強力なウィーン楽派の伝統の中に於いてのみ生き得るロマン性である。彼はモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェンに徹底的に追随した。しかし追随してもしきれないもの、すなわち彼における素質としてのロマン性が彼をユニークな存在としている。もし彼がベルリオーズやリストのように、交響曲の伝統を無視する居に出たならば、彼の旋律や転調の美しさはかえって台無しにしたことであらう。彼の音楽の美しさは、亭々たるウィーン楽派の矯木の木立の下に、人の心を惑わすように咲き出る香の高い蘭の花のようなものだと思う。

何とも歯がゆい物言いではないか。

前段で「この曲のロマン的な情趣とそれに似合わぬ伝統的な形式とその間の乖離」と否定的な指摘に付き合っておきながら、後段では「もし彼が交響曲の伝統を無視する挙に出たならば彼の旋律や転調の美しさはかえって台無しになったことであらう。」と、現実と与えられている名曲に依存しきった結論で良しとしている。

大事なことは、未完成交響楽作曲時にシューベルトに訪れていた情趣は大変に生命力の強いものであり、自ら形を形成してゆく力を持つということで、その作曲に対しシューベルトが既存の某何形式を借りたとか楽想を盛ったなどという見方はびんとはずれであり、彼に失礼ですらある。また、交響詩曲やその他の形式を生みつつ新しい音楽様式の創造をもたらすことすらこれほどの情趣、これほどの楽想なら可能だと思われる。ただ、それとシューベルトにそのようなことができたかどうかは全く話が別なのである。

具体的な形を持つ以前の未成の音楽的情趣なるものに作曲もしたことがないだろう評論家が実感ひとつ持てないのは当然で、出来上がった音楽からおぼろに想像することぐらいしかできないとしても致し方のないこと。ただし、最後に単なる比喻としてではあれ「花」も持ち出してきているところに、「人工のものでありながらも音楽にはどこか自然という、人知を超えたものとのかかわりがあるのかもしれない。」という気持ちが表れているようで救いがないではない。

これは現代の音楽評論家や芸術一般の批評家にも言えることかもしれないが、肝心なところの訳合いが分からぬままに比喻でぼかして結論に変える傾向、これは結構根強いかもしれない。ぜひ、その殻を破っていただきたいところだ。進化を重ね人々の意識を席卷し傲慢の限りを尽くす科学的思考に歯止めをかけるためにも。

なお、本論とは直接かかわりのないことでもあるが、辻氏の文章の引用箇所は20行足らず上の部分に明らかな誤りがある。気がついても誰も出版社に伝えないのだろうか。

曲の重要さを考えれば放置しておくわけにはいかないなのでその部分の文章を引用し、修正を加えさせて頂こう。

★ (d:V7 = cis:増5 6 の和音)

(第2楽章)第64小節から低音を欠く弦のシンコペーションの上に木管の美しい旋律が流れるが、これはc #、F、E、D ♭と遠い転調をしながら何の不自然さをも感じさせない手腕は。さすがにシューベルトであるとうなずかせる。

記、Eは明らかな誤りで、正しくはd (moll) である。

更に、その部分の転調を細かく記せば次のように成る。

c #、D、F、d、c #、C # (D ♭)

(完)

(ろくりあん・まさおか 本会 作曲会員)

# 会と会員の情報

## 1. CMDJ 会と会員のスケジュール

7月

3日(水) 並木桂子(Pf.) - 共演: 印田千裕(Vn.), 富永佐恵子(Vc.)  
ヴァイオリンとチェロとピアノのコンサート  
ドヴォジャーク: ドウムキー、モーツァルト: メヌエット、  
ホルスト: ジュピター他 【中小岩小学校、公民館他 15:30~他 入場無料】

4日(木) ピアノ部会第26回公演 ~華麗なる響き 2013~  
【杉並公会堂小ホール 19:00 開演 全自由席 3,500円  
問合せ: 日本音楽舞踊会議 Tel.03-3369-7496】

プログラム

- 1) 栗栖麻衣子&山下早苗(連弾)/ストラヴィンスキー: ペトルーシュカより
- 2) 太田恵美子/ラフマニノフ: ピアノのための前奏曲 Op. 3 No. 2 嬰ハ短調  
13の前奏曲 Op. 32 No. 5 ト長調, No. 12 嬰ト短調
- 3) 原口摩純/リスト=ワグナー: 「イゾルデの愛と死」  
リスト: 超絶技巧練習曲 第10番 ヘ短調
- 4) 北川暁子/ショパン: アレグロ・ドウ・コンセール
- 5) 大矢絢子/ラヴェル: 「鏡」より 洋上の小舟
- 6) 広瀬美紀子/助川敏弥: 前奏曲集より No. 1, No. 5 (初演)  
メシアン: 前奏曲集より第8曲「風に映る影」
- 7) 戸引小夜子/ボルトキエヴィッチ: エチュード op. 15 7, 9, 10番
- 8) 深沢亮子&草野明子(連弾)/シューベルト: 幻想曲ヘ短調 Op. 103 D. 940

5日(金) 声楽部会公演 歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート  
~中山晋平 大正ロマンとその時代~  
出演: 歌の案内人&バリトン 佐藤光政  
歌: 浅香五十鈴・内田暁子・浦 富美・笠原たか・嶋田美佐子・高橋順子  
吉仲京子・渡辺裕子  
ピアノ: 坂田晴美 【すみだトリフォニー小ホール 18:30 開演】

9日(火) 深沢亮子(Pf.) - 共演: 田原綾子(Vla.) シューベルト: アルペジオネソナタ  
他  
【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター 13:00】

21日(日) 機関誌編集会議 14:00~ 日本音楽舞踊会議事務所

21日(日) 「翔の会」20周年記念コンサート 深沢亮子賛助出演  
【浜離宮朝日ホール 13:30】

21日(日) 日本尺八連盟 埼玉支部 定期演奏会 -  
高橋雅光作曲: 尺八・箏・十七弦による大合奏曲「彩の国の旅路」(初演)  
【久喜市民文化会館 14:00 開演 入場料 3,000円】

21日(日) 作曲: 橘川琢/作曲: 清道洋一  
「ぷら임スペシャルプログラム『語りとテルミンで紡ぐ アグニの神』」  
1. 抒情組曲「日本の小径(こみち)《古道探訪集》op. 55」より「2つの風舞・  
~建長寺760年に寄せて」~テルミンとギターによる(初演)(作曲)橘川琢、  
(テルミン)大西ようこ、(ギター)三谷郁夫

2. 「アグニの神（原作：芥川龍之介）」（初演）（作曲）清道洋一、（語り）水沢有美、（演奏）ぷら임（大西ようこ・三谷郁夫）（美術）関根賢治  
【鎌倉・建長寺方丈（龍王殿） 16:00 開演】  
前売り 3,000 円／当日 3,500 円 + 建長寺拝観料 300 円が必要です。

## 8 月

22 日(木) 栗栖麻衣子(Pf.)他出演 - つぼみの会 子育て応援コンサート  
\*11:00~あいうえおんがくかい \*12:30~いろはにほっとコンサート  
\*15:30~かきくけコンサート(全3回公演) 【熊谷市文化創造館さくらめいと月のホール各部とも一般・小学生以上 500 円未就学児無料 通し割引券あり】  
【問合せ:事務局 080-3310-4238 日本音楽舞踊会議後援事業】

## 9 月

16 日(月) 深沢亮子(Pf.)デビュー 60 周年リサイタル 連弾と2台のピアノ作品による  
共演:野原みどり、小沢麻由子、五味田恵理子、栗栖麻衣子  
予定 モーツァルト、ドビュッシー、フォーレの作品  
【浜離宮朝日ホール 14:00 開演 問合せ:03-3561-5012 (新演奏家協会)】  
21 日(土) 浜尾夕美(Pf.) - ピアノリサイタル ノスタルジー~ロシアの巨匠たち  
スクリャービン:ピアノソナタ第3番、メトネル:ソナタ「回想」、ラフマニノフ:  
絵画的練習曲集より他 日本音楽舞踊会議後援事業  
【浜離宮朝日ホール 18:00 開演 問合せ:03-3561-50128 新演奏会協会】  
26 日(木) CMDJ 2013 年オペラコンサート  
【すみだトリフォニー 小ホール (詳細未定)】  
30 日(月) 深沢 亮子(Pf.) 翔の会 モーツァルト公開講座【10:00~会場未定】

## 10 月

28 日(月) 様々な音の風景X ~20 世紀以降の音楽とその潮流~  
【すみだトリフォニー 小ホール (詳細未定)】

## 11 月

8 日(金) 若い翼による CMDJ コンサート6  
【すみだトリフォニー小ホール (詳細未定)】 出演者募中  
11 日(月) 深沢 亮子(Pf.) - 翔の会 公開レッスン 【10:00~ 会場未定】  
25 日(月) 深沢亮子(Pf.) - 3 台のピアノのための協奏曲【文京シビックホール】

## 12 月

2 日(月) 並木桂子(Pf.) - 共演:岸洋子(Pf.)、関森温子(Voc.)、島田真千子  
(Vn.)他 アレンスキーの魅力(仮題)シリーズ1  
2 台のピアノの為の組曲第1, 2 番、ピアノトリオ第1 番、歌曲集より  
【杉並公会堂(小) 3,500 円(小学生以下 1,000 円) 19:00 開演  
問合せ:並木 080-3003-2102】  
6 日(金) 深沢亮子とその仲間による“ピアノと室内楽の夕べ”(仮称)  
出演:深沢亮子(Pf.) 恵藤久美子(Vn.) 安田謙一郎(Vc.)  
助川敏弥: Gismonda(2010~2011)、ちいさきいのちのために(2004)  
モーツァルト: ピアノトリオ G-Dur K. 564  
ミヨー: ヴァイオリンとチェロのためのソナチネ OP. 324  
モーツァルト: ピアノトリオ C-Dur K. 548 【音楽の友ホール】  
8 日(日) 栗栖麻衣子(Pf.)他出演

ーびあの×びあの～2台ピアノによるコンサートリスト：交響詩 前奏曲、  
ラフマニノフ：組曲第2番、ブラームス：ハイドンの主題によるヴァリエーシ  
ョン、2台8手、2台12手作品他

【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール 一般 2000円/高校生以下  
1500円問合せ：事務局 080-3310-4238 日本音楽舞踊会議後援事業】

2014年

1月

19日(日) 声楽部会公演「2014年 新春に歌う」(仮称)

【すみだトリフォニー小ホール(昼間公演)】

3月

10日(月) 邦楽部会コンサート(仮称)

【すみだトリフォニー小ホール(詳細企画)】

4月

10日(金) フレッシュコンサート2014【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

5月

26日(月) 作曲部会公演 【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

6月

13日(金) ピアノ部会公演【オペラシティリサイタルホール(詳細未定)】

会員スケジュールの表示(凡例)について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催(含む、各部会主催)公演予定です。

明朝体文字は会員から寄せられた情報、および、会関係者が企画、参加して居る事業の情報です。

明朝体太文字は、運営に関わる会議等の予定です。

「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上項目内容を変更する場合があります。

\*\*\*\*\*

## 2. 新入会員挨拶



### 高橋 澄子(たかはし すみこ) 箏 正会員

生田流箏曲宮城社に所属して、地歌、箏曲を演奏しております。御会におきましては作曲会員の高橋通(夫)の作品を何度か演奏させていただきましたことがあります。この度正会員とさせていただきます誠に有難うございました。

5、6才のころから、尺八の吉田晴風夫人に師事、芸大に入学後、宮城喜代子先生、数江先生、小橋幹子先生、上木康江先生に師事。現在では主に矢崎明子先生に御教示いただいています。

古典の奥深い芸術性、宮城道雄の音楽、それに伝統を重んじ、更に現在の世界にも生きている新しい作品の数々に接するのは本当に楽しみです。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 編集後記

先月はまだ最終決定されていなかった、富士山が6月22日にユネスコの世界遺産委員会の審議を経て、文化遺産として登録されることが決定しました。富士山は世界中の人が知る日本のシンボルですから、登録は当然のことですが、イコモスの判断で除外されていた三保の松原が、大逆転で世界文化遺産に含まれることになりました。外国の委員を説得し、そこまで漕ぎつけた関係者の努力に敬意を払いたいと思います。ところで、これからは梅雨の末期の豪雨が心配されますが、7月には、ピアノ部会と声楽部会のコンサートが相次いで開催されます。多くの方々のご来場をお待ちしております。7月後半からは梅雨が明けて、盛夏の候となりますが、昨年のような猛暑にならないことを願いたいと思います。では、ゆっくり寝て食べて、梅雨と、盛夏の時期を乗り切りましょう。

(編集長：中島洋一)

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

---

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光  
戸引小夜子 北條直彦

---

### 音楽の世界 7月号(通巻 550号)

2013年7月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP：<http://cmdj1962.com/> E-mail：[onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D：音楽の世界編集部 Tel：(03)3369 7496 印刷：イゲタ印刷(株) Tel：(04)7185 0471

購読料 年間：5000円 (6ヶ月：2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\*日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

\*乱丁、落丁がございましたらお取替えします